

C2
3
035

十四



東 京 圖 書 館	
新 門	一 函
一 部	二 架
類	一 〇 九 號

指
 令
 續
 篇
 近藤圭造編輯
 明治八年分
 一

近藤圭造編輯

聽訟指令續篇

明治八年第十月刻



特39

49

聽訟指令續篇目錄

貸借之部

第一卷

- 第一 藩債ト稱スル村借ノ事
- 第二 滞利証文ノ事
- 第三 引當地所賣買ノ事
- 第四 質地差違レノ事
- 第五 年賦月賦金出訴ノ事
- 第六 身代限訴訟入費ノ事
- 第七 養子離縁前借財ノ事
- 第八 村役中借財ノ事

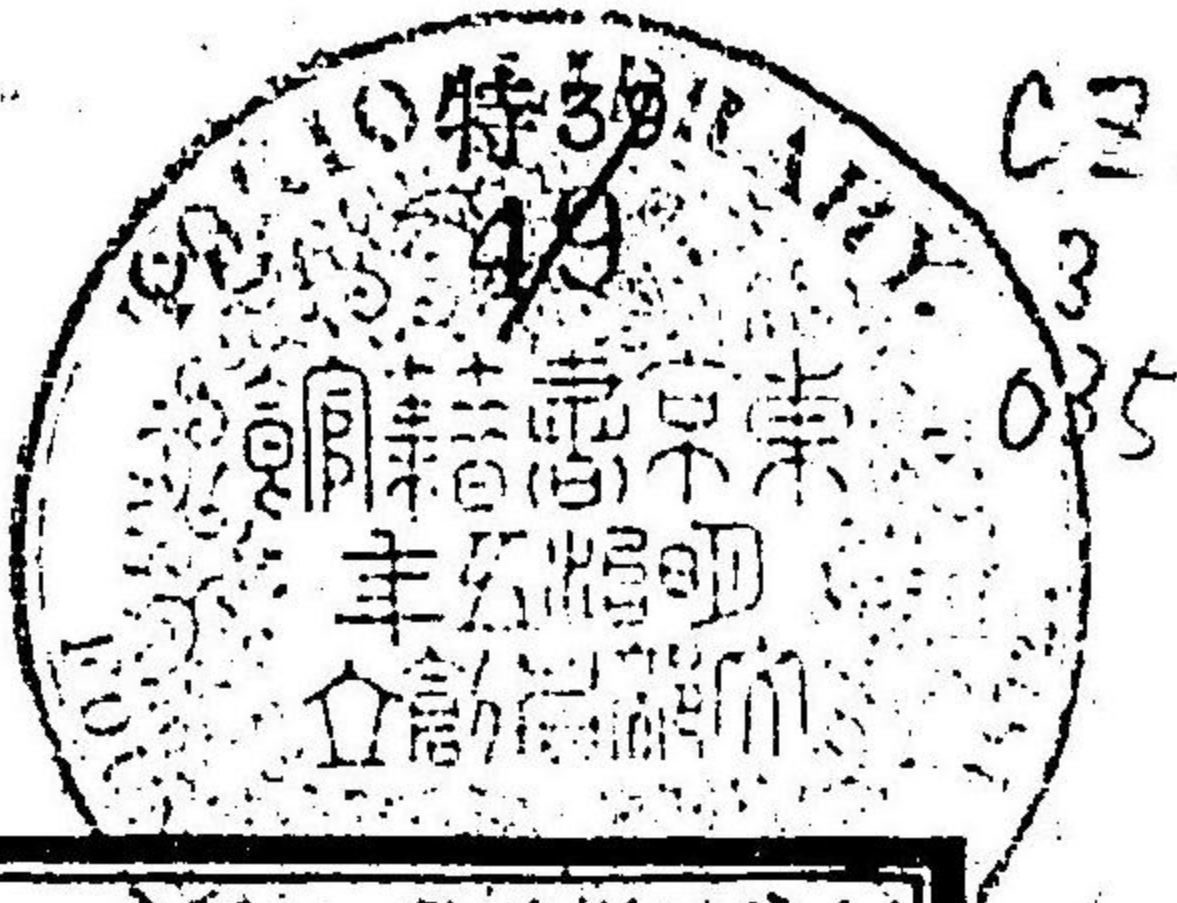
明治八年十月刻

初丁

近藤圭造編輯

聽訟指令續編

明治八年第十月刻



聽訟指令續編目錄

貸借之部

第一卷

- 第一 藩債ト稱スル村借ノ事
- 第二 滞利証文ノ事
- 第三 引當地所賣買ノ事
- 第四 質地差違レノ事
- 第五 年賦月賦金出訴ノ事
- 第六 身代限訴訟入費ノ事
- 第七 養子離縁前借財ノ事
- 第八 村役中借財ノ事

明治九年圖書寮交付

初丁ノ

- 第九 脱籍中質入証書替遲滞ノ事
- 第十 身代限分散金配當ノ事
- 第十一 別居異産ノ弟兄ノ宅質入レノ事
- 第十二 損料貸ノ事
- 第十三 名當ナキ証書ノ事
- 第十四 返濟期約ナキ預ケ金ノ事
- 第十五 質入書入ノ事
- 第十六 私印偽造借用金ノ事
- 第十七 奉還証書讓引ノ事
- 第十八 賣掛金滞ノ事
- 第十九 証書添ヘ伺ノ事

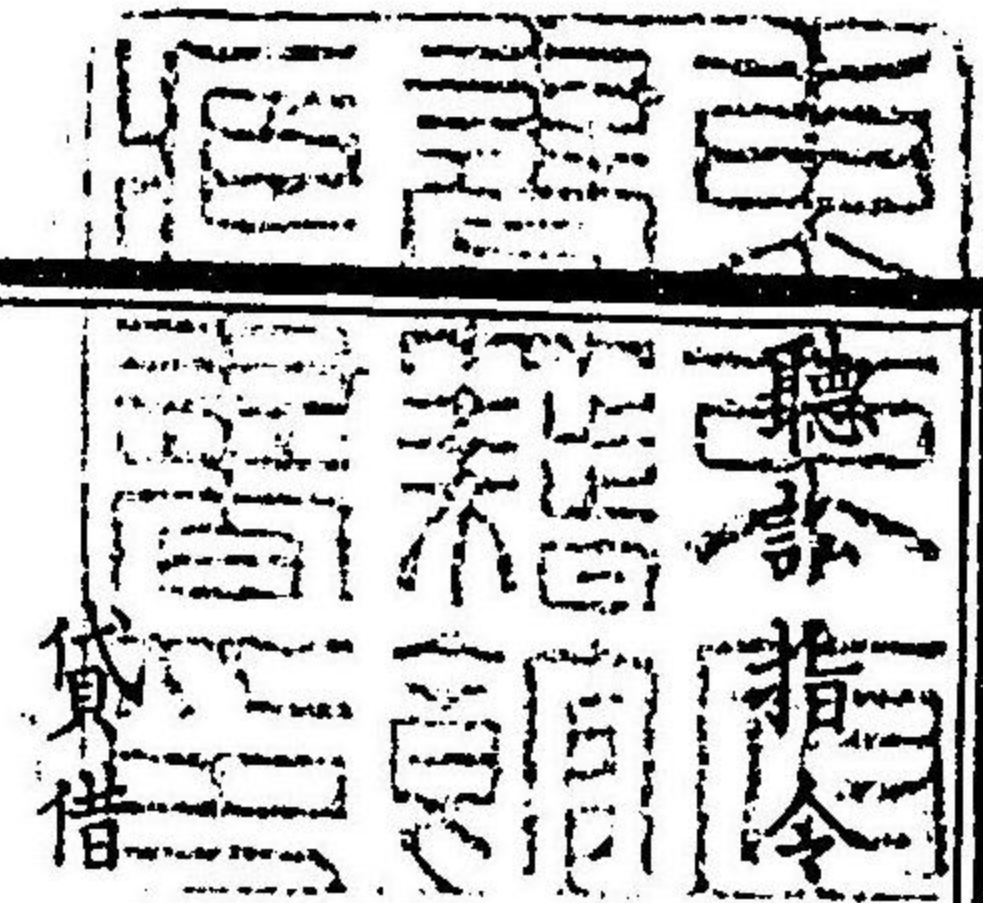
- 第二十 満期質入訴ノ事
- 第二十一 利足日割分割ノ事
- 第二十二 絶家後相續ノ事
- 第二十三 証書取調ノ事
- 第二十四 準盜ノ事
- 第二十五 自己書入ヲ為シタル証書ノ事
- 第二十六 出訴期限第三條處分ノ事
- 第二十七 區入費等身代限ノ事
- 第二十八 質入レ証書ノ事
- 第二十九 身代限リ後利息ノ事
- 第三十 揭示後訴出ル貸金ノ事

- 第三十一 戊辰後書改タル証書ノ事
 - 第三十二 隱居ノ負債ノ事
 - 第三十三 身代限リノ事
 - 第三十四 御雇人請求ノ事
 - 第三十五 質地ノ事
 - 第三十六 預リ証ノ事
 - 第三十七 年期有無預ケ金ノ事
 - 第三十八 負債二件
 - 第三十九 年號略記ノ事
 - 第四十 出訴期限ノ事
- 賣買之部

四十二丁×

- 第一 豆板銀竊賣ノ事
- 第二 出訴期限ノ事
- 第三 無証據ノ事
- 第四 奉還証賣買ノ事
- 第五 地所賣買ノ事
- 第六 賣買淹滞ノ事
- 第七 公債書犯則ノ事
- 第八 出板ノ事
- 第九 會社賣買ノ事
- 第十 扣ハ帳ヲ以テ賣買ノ事
- 第十一 約定違約ノ事

- 第十二 生糸外國送りノ事
- 第十三 賣掛ヶ代金ノ事
- 第十四 地所引渡ノ事
- 第十五 賣買手附金ノ事
- 第十六 建家賣渡ノ事
- 第十七 手形出訴ノ事
- 第十八 地所賣買ノ事



續篇卷一 明治八年分

三河 近藤圭造 編集

藩借ノ村

第一 藩借ト稱スル村借ノ事

司法省日誌第二号滋賀縣同
明治八年一月八日指令

京都府下三井三郎助代言人澤井茂吉ヨリ、當縣下蒲生郡蛇溝村外五ヶ村へ係リ、貸金催促ノ儀、別紙一印之略ノ通及出訴候ニ付、被告取糾候所、二印之略ノ通リ村方私借証文ニテ、其印形等モ自分共實印ニ相違無之候得共、其實藩債ナリ、其証據ハ舊仙臺藩京都邸留守居野原平三外一人ヨリ、右藩蒲生郡陣屋誥守屋豊治へ遣シタル庚リ証文ノ添書有之ヲ以テ、答

書差出候ニ付、明治六年第三百四十一号公布ノ次第モ有之、一應取調候所、藩借ニ相違無之舊仙臺藩ヨリ、藩債ノ内、組込、大藏省へ申立置候分ニ有之候、然ル所原告ニ於テハ、村方ヨリ舊藩へ轉貸ノ儀ハ一切不存旨申立候ニ付、御省日誌本年第八十二号別紙三印^略ノ通、右金ハ現ニ舊藩ノ負債ニ相違無之故、明治六年太政官第三百四十一号公布ニ基キ、直ニ金主へ公債ノ御處分可相成儀ニ付、村方ヨリ濟方難致旨申立、容易ニ承服ノ体無之候、然ルニ右公布ハ公債處分上ノ事ニシテ、裁判上ノ事ニ無之ト雖モ、公債處分ト、裁判處分ト夫是相抵觸^{チカカ}スル様被存、被告ノ承服セザルモ、亦有一理ニ似タリ、仍テ舊藩ト村方トノ間ニ、轉貸ノ証據有之上ハ、一旦訴訟

ヲ結フト雖モ、右三百四十一号公布ノ通、直ニ金主へ公債ノ處分可相成筈ナルヲ以、訴帖下戻シ、更ニ其筋へ可申立旨申渡候様ノ儀ハ難相成哉、奉伺候也、但昨六年第八十二号公布ニ依レハ、舊仙臺藩再立已前ノ藩債ニ付、公債ニ不相立分ニ有之候、

指令

添証文中ニ、地頭ノ入用等ニ無之旨明文有之、殊ニ三井三郎助方ニ於テハ、舊仙臺藩へ轉貸ノ儀、一切不存上ハ、村方へ濟方可申付事、

第貳 滯利証文ノ事

同上愛知縣同
八年同月日指令

大坂安堂寺橋通二町目山内宗助代言人同所八木和助ヨリ、

滯利

當縣管下尾張國中島郡下祖父江村住當縣貫屬士族山内永三郎外二人へ相係リ、貸金催促ノ儀別紙甲印証文ヲ以テ及出訴候ニ付、取調候處原告人於テハ、元金壹萬三千圓、川西屋吉兵衛貸附、金銀器物質物ニ取リ、別紙乙印證書取置候所返濟運滞ニ及ヒ候ニ付、吉兵衛へ對談ノ上、原借主舊今尾藩へ直テニ催促ニ及ヒ、返辨相成候歟、利金ノ内千二百圓不足致スニ付、甲印証文取置候旨申立、被告人於テハ、舊藩要用ノ儀有之、吉兵衛借主ニ相立、藩主所有ノ金銀器物質入ニ差入借用有之所、宗助ヨリ追々催促ニ付、返辨方取計、利金ノ内千二百圓不足イタシ、証文差入有之、既ニ辛未十月藩債取調ノ歟、其筋へ書上置候ニ付、公債ニ可相立金筋ノ趣申立候得共、右

ハ滞利證文ニテ、舊藩々負債償還御處分御布告面ノ通、公債ニ不相立上ハ、證文面借主官名ヲ用ヒ、且肩書ニ藩名記載有之ニ付テハ、舊知事取糺候上無相違ニ於テハ、知事ノ私債ト見做シ、直ニ知事ニ濟方申付、知事於テ相違ノ趣申立候ハ、借主三名ノ内、濟方可申付哉、又ハ証文面官名或ハ肩書ニ藩名等記載有之候モ相對私借ノ文言ニ付、借主三名ノ者へ濟方申付候テ可然哉、甲乙印證書寫并、原被告ヨリ差出候手續書之略相添此段相伺候也、

指令

滞利ノ証文ニテ、藩債ニ相立サル上ハ、裁判上私借ノ處分ニ及サル事、

引當地所
賣買

第三

引當地所賣買ノ事

同上大分縣伺
八年同月日指令

小倉縣下豊前國宇佐郡橋津村農松本二三治ヨリ、當縣下豊
後國々東郡白野村農安永虎三郎へ掛リ、貸金淹滞催促ノ儀
出訴ノ處、丁卯十二月晦日以前ニ係ルト雖モ、沽券狀ヲ債主
ニ渡レタルモノニ付、御省壬申第四十一号御布達并本縣伺
御指令七年第十四号第二條讓渡証文モ、則沽券狀ト見做シ
質入ノ處分ニ可及トアルニ依リ、正當質地ノ處分ニ及フ可
キ積リニテ、准理致シ居候所、御省日誌本年第八十五号京都
裁判所伺御指令ニ、壬申四十一号布達中十條但書ニ質入ト
見做ト之アルハ、書入ニ區別シ、丁卯己巳ノ期限ニ拘ラス、總
テ採上裁判スヘキ事ヲ示シタル迄ニテ、沽券狀ノミヲ受取

タルヲ、正當質地ノ處分ニ及フ可トノ事ニ之ナクニ付、明治
六年第十八號御布告以前ニ、定約期限ノ切レタル訴訟ハ、即
チ取上裁判可及云々トアリ然レハ、該件ノ如キハ、正當質地
ノ處分ニ及ハスレテ、通常貸金ノ處分ニテ可然儀ト存シ候
ヘハ、自然ハ書入地所ノ處分ニ可及モノ歟ト、疑惑ヲ生シ候
ニ付、別冊之略相添相伺候、若シ書入地所ノ處分ニ可及儀ニ候
ヘハ、該件ハ被告ニ於テ、書入ノ地所已ニ他人へ永代賣却致
シ居候間、刑法ノ裁判ニ相廻レ可然哉、此段相伺候也、

指令

原告訴狀中、引當ノ地所賣買ノ節、買主於テ引當中ノ地所ナ
ルヲ承諾シタル趣、申立之レアリ、其事果シテ相違ナキ時

八、聽訟ノ吟味ヲ中止シ、斷獄課へ可相廻事

第 四 質 地 差 違 レ、事 同第六号栃木裁判所伺
八年一月十日指令

丁卯前後質地証書ニテ、年貢諸役モ法ノ如ク金主ニテ勤ム
レ氏、昨六年七月迄ニ戸長等ノ割印ヲ不受シテ、直小作証書
ヲ以テ、小作滞リ訴出候ハ、其小作滞、右七月分迄ハ濟方申
付、八月以後ノ分、元金百分ノ六ヲ利息トシ、濟方可申付裁、相
伺候也、

指令

裁判上ニ於テハ伺ノ通、但本証文ノ約定ニヨリ、相對取引
ヲナスハ格別ノ事、

第 五 年 賦 月 賦 金 出 訴 ノ 事 同第七号長崎裁判所伺
八年一月十四日指令

質地

年賦金

司法省日誌本年第四百四十八號愛知縣伺、商人互ノ賣掛代金
ノ金百圓又、一ヶ月十圓宛ノ月賦濟約定致置候者、返金相滞
リ、本年七月一日以後及出訴候者有之所、昨六年九月ヨリ、同
十二月迄四ヶ月分四十圓ハ、既ニ出訴期限ヲ過候ニ付、濟方
不申付、本年一月ヨリ六月迄六ヶ月分六十圓ハ、出訴期限内
ニ付濟方可申付云々伺ノ通御指令有之、右ニ依レハ月賦金
額ハ其月切レヨリ、出訴ノ期限ヲ起算致シ候事ト相心得、此
儀極メテ密ナリト雖萬一月々相滞候節ハ、月賦ノ月數ニ寄
リ、一事件ニ付數十度ノ訴訟ト相成、隨テ訴訟入費モ相嵩實
際上多少人民ノ苦情モ可有之哉、可相成ハ年賦月賦金ノ滞
ハ、元金滿限ヨリ出訴期限ヲ起算シ、假令何ヶ年何ヶ月賦ニ

候トモ、元金限内ノ訴訟ハ、何時ニテモ取揚ケ受理致シ度、然
トモ出訴期限ノ御主意タル、人民互ニ延期勘辨ヲ加ヘ、數多
ノ歲月ヲ過去ルタメ、事理曖昧ニ立至リ、不都合ヲ生シ候事
ニ付、前條御聞濟不相成儀ニ候ハ、昨六年第三百六十二号
出訴期限御規則中、年賦月賦金、其月々ヨリ出訴ノ期限ヲ可
起算ノ明文無之、恐クハ人民於テ不相心得、期限ヲ過去リ、不
知權利ヲ失シ候テハ、愍然ノ至ニ付、年賦月賦ノ箇條、細密御
布達相成様仕、度、兩條ノ内御指令被下度相伺候也。

指令

年賦月賦ノ約定ニシテ、其年末月末ヲ以テ、一部分ノ期限ト
シ、出訴期限ヲ起算セサル時ハ、何ヲ以テ年賦ト稱シ、何ヲ以

テ月賦ト稱スヘキヤ、且又何ヲ以テ出訴期限ヲ起算致スヘ
キヤ、若シ年賦月賦ヲ、年末月末ヲ滿期トセサル片ハ、二十年
賦ハ二十年ヲ滿期トシ、十二ヶ月賦ハ十二ヶ月賦ヲ滿期ト
スルカ、果ソ然ラハ十二ヶ月賦ト、一ヶ年ト何ノ區別アルヤ、
二十年賦ト二十年期ト何ノ區別アルヤ、試ニ二十年期ト、二
十ヶ年賦トノ區別アルヲ尋思スル片ハ、月末年末ヲ年月賦
ノ滿期ト為スノ理ハ、自カラ判然タルベシ、右ニ付是等ノ一
ハ人民於テ、承知致ス可キ筈ト可相心得事、但シ原告人即チ
金主催促スヘキ期ヲ出訴期ト心得ヘシ、年賦月賦ハ、催促ノ
期ハ何日ナリヤト尋思スヘ事、

第六

身代限訴訟入費ノ事

同上滋賀縣向
八年一月十五日指令

本年十月十四日附、酒田縣伺へ對シ、身代限濟方處分ニ及テ
節、直者訴訟ニ付テノ入費ハ、貸金高ト合算シ、各債主ト平準
ノ割賦ニ可致事ト御指令有之候、然ルニ糶賣代金不足ニシ
テ、其訴訟入費ヲモ全償却スルヲ能ハス、不足相立候節、受人
ヨリ辨償スヘキ筋、証文ナル時ハ、貸金高ト俱ニ右ニ訴訟
入費ノ不足分ヲモ、受人ニ償却可為致筋ト相心得可然哉、
同斷受人無之ハ、其不足金高ヲ新証文ニ認サセ、規則ノ通裏
書ノ上、債主へ下渡可然乎、相伺候也、

指令

第一條 伺ノ通

第二條 元證文へ裏書キ可致事、

第七 養子離縁前借財ノ事

同第十一号宮崎縣伺
八年一月十九日指令

一旦人ノ養子トナル者、養父隱居ノ後、家督相續シ、其戸主タ
ルノ時、他ヨリ金ヲ借受、約定期限内離別トナリ、實家ニ歸ル
ノ後、右期限過キ返辨滞リ、債主ヨリ右負債主ヲ相手取り、出
訴ニ及ヒ候者之アリ、右ハ負債主當時實家部屋住ノ者ニ付、
辨濟不相調時ハ、一身所有ノ財ヲ以テ償却可申付哉、又ハ昔
日戸主タルノ時借、用ノ金タルヲ以テ、舊養家現今相續ノ者
へ係リ、身代限迄ノ處分ニ及ヒ可然哉、當時訴訟中ニ付、至急
御指令有之度候也、

指令

舊養家相續ノ者へ償却可申付事、

村役中
借財

第八

村役中借財ノ事

同上三重縣同
八年同月日指令

當縣管下伊勢國奄藝郡稻生村農鈴木甚兵衛外三名ヨリ、御園村農宮崎仁右衛門へ掛ル貸金催促ノ件、被告宮崎仁右衛門儀、在屋在勤中、古來ノ習慣ニ依リ、年貢收納ノ際、村後連署金子他借シ、貢納不足ニ填充セシ儀判然タルニ於テハ、村方帳簿ヲ照査シ、小前ヲシテ償却セシム可キノ所同人儀右金借入レレ覺無之旨ヲ陳述ス、故ニ帳簿ヲ照査シ、及ヒ小前ヲシテ償却セシムヘキノ方便無之、然レバ其證書印影ハ相違無之旨申立ル上ハ、實印肝煎ニ預クル云々、公然ノ習慣ニ非ス、且ツ其印影ヲ押捺ヤストノ陳述等、皆無証ニ屬ス、依テ一切之ヲ採用セズ、斷然被告宮崎仁右衛門ヲシテ、原告へ償辨

脱籍中
質入

ヤシメ可然乎、但連印者ハ代償等ノ明文無之ヲ以テ、別段辨償等ノ處分ニ及フ間敷ヤ、別紙書類之相添相同候也、

指令

伺ノ通 但利足ヲモ計算可為致事、

第九

脱籍中質入証書替遲滯ノ事

同上新治縣同
八年同月日指令

當縣管下常州筑波郡上郷村農土田周平事、負債相嵩候事故ヨリ、明治五壬申九月中及脱籍、當時尋中ノ者ニ候所、同人所持地ノ内、明治三庚午年中同郡造谷村農木村彌太勇ナル者方へ、本年迄五ヶ年季質地ニ差入候分有之、昨年中質入書入御規則公布ニ依リ、證文書改可申テ、本人出踪中、書替差支候事情等ヲ以テ、即今ニ至リ、前書周平倅并債主及ヒ村吏等ヨ

リ、延期願出右ハ客年七月中ニ可書改ハ期限ニテ、當人脱籍處分難致候ハ、其判可申出ス、此節ニ至、延期等願出候ハ、等閑ノ筋ニ候ヘ、雙方熟議ノ上ハ、即今脱籍尋中ノ云々肩書ニ詳記シ、碎名前ヲ以テ為書替可然哉、又ハ書替期限過去候儀ニ付、本年六號公布ノ通、負債主分散ノ時、他ノ債主ハ對シ先取りノ特權ヲ失ヒ候者ト見做シ、從前ノ質地金高ハ、尋常貸借ト為相心得、且現今債主ハ渡有之地ハ、本人復籍若クハ家名相續人相立候上、其者存意ニ應シ、處分可致事ト可相心得旨申渡置可然筋ニ候哉、此段相伺候也、

指令

雙方紛議ヲ生シ、訴訟及ヒタル時ハ、裁判上處分ニ可キ事ト

レ、債主負債主等協議ヲ以テ、延期願出ハ、訴訟ノ筋ニ無之ニ付、延期處分ノ儀ハ、其筋ニ可相伺、裁判上ニ於テハ關係無之事、

第拾身代限分散金配當ノ事

同上京都裁判所伺
八年同月日指令

裁判所取締規則ヲ犯シ、罰金ヲ科シタル者、無力ニシテ其罰金ヲ納ムル能ハサルカ為ニ、身代限リヲ申付ル時ハ、民法ニ依リテ處分スヘキ儀ニ可有之、隨テ分散金配當ノ順序ハ、質入書入有之負債ヲ第一番ニシ、身代限ノ為ニ裁判所、又ハ戸長役場ニ入費アル者ハ、其入費ヲ第二番ニシ、罰金ヲ第三番ニシ、訴訟入費及尋常負債ヲ第四番ニシ、可然哉、相伺候也、

指令

分散金

罰金ノ儀ハ、斷獄課ノ處分ニ附シ、民法上分散配當金ノ順序
ハ、同面第二番ノ者ヲ第一番ニ取立、質入書入ハ其品物ノ代
價ニ付テ、先取ノ權ヲ有シ、訴訟入費ハ、尋常負債ト同一ニ見
做ス可キ事、

第拾壹

別居異産ノ弟兄ノ宅質入レノ事

同上鳥取縣伺
八年同月日指令

爰ニ別居異産ノ兄弟アリ、兄死シテ后、其妻親族ノ為メニ離
縁セラレ、只一人女家ニ残り、幼ニシテ一家ヲ立ル事能ハサ
ルヲ以テ、外親戚ノ内引取、付籍養育シ、成丁ノ上再ヒ家名ヲ
起スノ示談ヲ以テ、兄ノ家宅ヘ家守ノ為、弟住居罷在、其家宅
ヲ他人ヘ質物ニ差入レ、金子ヲ借用シ、返済スル事能ハサル
ヨリ、債主出訴ニ及ヒ、吟味ヲ遂ル處、其證書中、兄ノ家宅ヲ質

兄ノ宅
質入

物トシテ入置云々ノ明文アリ、右ハ弟兄ノ家宅ヲ自儘質物
ニ差入ル、庶刑法ノ裁判ニ處シ、借用金ノ儀ハ、身代限りノ
處分ニ及ヒ可然哉、尤右等證書ニ明文アツテ、負債主一判ノ
證書取置ヘキ道理無之、素ヨリ沽券狀等モ不取置上ハ、只質
物ナキ貸借ノ裁判ヲ為シ可然哉相伺候也、

指令

訣證書ハ、原約期限未滿ニ有之哉、又ハ期限既滿ノモノニ有
之哉、事實ヲ以テ可伺出事、

第拾貳

損料貸ノ事

同上京都裁判所伺
八年一月二十日指令

損料貸ノ儀ニ付、辛未四月十五日ノ御布告ニ、向後料錢ノ儀
期限相立、慥成證書取置訴出候上ハ、三日ニ不限、貸金銀ニ準

損料貸

シ、濟方可申付ト之アリ、右ハ御發令以前ニ在ル三日以上ノ
 損料滞リト雖モ、御發令以後ニ之ヲ訴出ルニ於テハ、採揚裁
 判ニ及ヒ苦シカラサル乎、
 前條御布告ニ貸金銀ニ準シ、濟方云々ト之アルニヨルバ、丁
 卯十二月、又ハ己巳六月前後、區分ヲ以テ、採揚不採揚之
 ル儀ト相心得可然乎、
 前條損料錢ノ滞リハ、貸金銀ニ準シ、丁卯己巳ノ前後ヲ以テ、
 採揚不採揚ノ區分可有之トイヘ、其損料ヲ以テ貸ス所ノ
 物品ヲ返却セサルヨリ起ルノ訴ハ、料錢滞リノ訴トハ、一様
 ニ看做シカクキヤニ相考候ニ付、丁卯己巳ノ區分ナク、採揚
 及裁判可然乎、相伺候也、

指令

第一條 損料貸ノ儀ニ付、太政官御布告ハ無之事、
 第二條 丁卯己巳前後ニ拘ラス、取揚濟方可申付事、
 第三條 前條同様可心得事、

第拾三

名當ナキ證書ノ事

同第十二号白川縣伺
八年同月日指令

名ナキ
證書

爰ニ甲某ヨリ乙某ニ貸金アリ、其證書タルヤ債主宛、且屋號
 モ之ナリ、止夕御屋敷様トノミ記載アル莊乎タル證書ナレ
 ハ、名宛ナキ證書モ同一ノ儀ト謂フヲ以テ、甲ヨリ乙ヲ相手
 取り、名前書入ノ出訴ニ及ヘリ、右ハ名宛且屋號無之上ハ證
 據ニ難相立候ニ付、斷然准理ニ不及シテ可然哉、又ハ嚮^{ナキ}ニ長
 崎裁判所ヘノ御指令、年號月日略記、其書入ヲ訴フレハ、採用

可致旨アルヲ比附シ、准理不苦哉、然ト雖モ其後三潯縣ヘノ御指令ニ、年號月日略記書入ノ訴ハ、當時御詮議中ニ付、追テ何分ノ御指令可有之旨相見ヘ候ハ、右長崎裁判所ヘノ御指令モ、暫ク御見合ノ儀ト被存候、且年號月日略記書入ト、名前書入ヲ求ムルノ訴ハ、事少シク異アルニ似タリ、何トナレハ年號月日略記ハ、既ニ債主不債主ノ名前確然、即チ其証書タルニ似タリト雖モ、其御屋敷様ノ如キハ、茫乎トシテ誰レヲ指シ候儀モ判然タラス、獨リ名宛ナキ證書モ一般ニ付、右書入ヲ求ムルノ訴ヘハ、准理ニ不及シテ可然哉、
前條止タ御屋敷様トノ記載有之証書ノ如キ、其名前書入ヲ求ルノ訴ハ、果シテ准理ニ及ハサル片ハ、若シ當談ノ官吏、

目安糾ニ失シ、既ニ受理シ、被告ヘ答書ノ指令ニ及ヒ、日限内被告無異儀、其名前ヲ記入シ、原被和解ノ書面ヲ出シキニ至リ、其証書既ニ貸借ノ約定期限ヲ過キタルモノナレハ、原告ハ直ニ出訴スヘキ權利ヲ生シ、官吏失錯ノ為メニ其僥倖ヲ得、被告ハ僥倖ヲ免レタルニ、尚又訴ヘラル、ノ義務ヲ生スルニ付、右官吏ノ失錯ハ改正ニ不及取上裁判シ、尋常貸借ノ處分ニ及ヒ可然哉、相伺候也、

指令

第一條 伺ノ通、

第二條 被告ニ於テ異儀ナク名前ヲ記載シタル上ハ、濟方ノ裁判及フトモ不苦事、

期約金

第拾四 返濟期約ナキ預ケ金ノ事 同第十九号小田縣伺
八年二月五日指令

返濟ノ期約無之預ケ金別紙寫ノ如キ証文ヲ以テ訴出ル者有之節ハ、通常ノ預ケ金同様取上裁判可然哉、相伺候也、

紙別預リ手形ノ事

一金十四兩三分

右之通造ニ預リ置申候以上

寅三月十日

五屋 庄兵衛印

三原屋善兵衛様

指令

伺ノ通、

第拾五 質入書入ノ事 同第二十三号千葉裁判所伺
八年二月十五日指令

質入書

明治六年第十八號ヲ以テ御布告相成候、地所質入書入規則第十條ニ、一箇所ノ地ヲ、二重三重ニ書入候儀ハ不相成ト有之、右ハ素ヨリ條理ニ於テ為スヲ得應カラサル事ニ候得共、本省日誌本年第十二號新潟縣伺御指令ニ、二重書入ノ事ハ、之ヲ問ニ不及トアリ、依テ事犯右規則御頒布已前ニ在ル者ハ、其罪ヲ問ハサル事ニ候哉、

事犯右規則御頒布後ノ者ハ、雜犯律不應為條ニ依テ科斷シ可然候哉、相伺候也、

指令

第一條 明治六年八月一日以後ト雖モ、後金主承知ノ上、二重書入ヲナスハ、犯則ヲ以テ論ス可カラス、同月日以前ノ

分ハ、無論伺ノ通りニ有之候事、

第二條 地所書入質入規則御頒布以後ハ、最初ノ書入レニ、戸長ノ與印ヲ為シタル地所ヲ以テ、再度書入レト為スモノハ、重典賣田宅律ニ照シ處分ス可シ、尤^モ後金主承知ノ上為シタルモノハ、第一條ニ指令ノ通心得可シ、

但シ最初ノ書入レニハ、戸長ノ與印ナクシテ、再度ノ書入レニ^ミ、其與印アルモノ、又ハ再度ノ書入レニハ、與印ナクシテ、最初ノ書入レニ^ミ與印アルモノハ、本條重典賣ノ罪ヲ問フニ及ハス、身代限りノ處分ニ止ム可シ、

第拾六 私印偽造借用金ノ事

同第二十五号濱田縣伺
八年二月十八日指令

偽印借用

詐偽律ニ、凡私印ヲ偽造スル者ハ、杖一百、財ヲ得ル者ハ、贓ニ計ヘ、各盜罪ヲ以テ重キニ從テ論スト有之處、既ニ金錢借取費用スル上ハ、返辨ノ意有ルノ踪跡明カナリト雖モ、盜賊ヲ以テ論スヘキ哉、又ハ返辨ノ意有ル明カナリハ、私印偽造ノミヲ以テ論シ、盜賊ヲ以テハ論セサル儀ニ有之ヘク哉、相伺候也、

指令

私印ヲ偽造シテ、金錢ヲ借用スル者ハ、偽造ノ罪懲役百日ヲ科シ、負債金ハ民事ノ裁判ニ付シテ處分ス可シ、但シ情狀ニ依リ、民事ノ裁判ニ付シ難キ者アラハ、口書ヲ以テ伺出可シ、

第拾七 奉還証書讓引ノ事 同第二十六号愛知縣伺
八年二月二十日指令

奉還

家禄奉還ノ者へ下賜ハル公債証書ヲ御下渡以前、讓引等ノ
約定致シ候者、違約ニ及ヒ、即今別紙^略ノ如キ証文ヲ以テ及
出訴向間々有之、右ハ未夕拜授セサル以前ハ、即チ家禄ヲ讓
引致スモ、同様ノ儀ニ可有之欵ニ候得共、公債証書ノ儀ハ、讓
渡並賣買勝手次第タルヘキ旨ノ御布告モ有之付テハ、現ニ
家禄ヲ讓引、又引當等ニ致シタルトハ相違ノ慮モ有之、全ク
右御布告ニヨリ、將來ヲ約シタル儀ニテ、已ニ御下渡シノ後
ニ訴出ルニ於テハ、壬申第三百號御布告ニモ照準致シ難キ
ニ付、取上致裁判候テ可然哉、相伺候也、

指令

採上裁判可及事

第拾八 賣掛金滞ノ事 同上同縣伺
八年同月日指令

賣掛金

華士族ノ者、家禄ノ餘分ヲ穀屋へ賣リタル代金滞、農業ノ者、
收獲ノ米麥、或ハ野菜ノ類ヲ、穀屋又ハ青物問屋へ賣リタル
代金ノ滞、

漁者ノ自ラ漁スル所ノ魚ヲ、魚問屋へ賣リシ代金ノ滞、陶工
自ラ製スル所ノ陶器ヲ、陶器問屋へ賣タル代金ノ滞、右ハ商
人相互ト見做シ、六ヶ月ノ期限ニテ可然哉、又ハ商人ヨリ商
人ニ非サル者ノ反對ト見做シ、一ケ年ノ期限ニテ可然哉、相
伺候也、

指令

第一條ヨリ第四條迄、一箇年ノ期限ト可心得事、

第拾九

證書添へ同ノ事

同第二十九号飾磨縣伺
八年二月二十七日指令

証文

別紙証文ノ體裁ニテモ、矢張村入用滞リト見做シ、裁判致シ

可然哉、但利足附ハ無論裁判ニ及ハサル儀ト、相心得可然

哉、

別紙証書

銀十貫目

右ノ銀子、村方要用ニ付、借用申處實正ニ御座候、來未三月
限、御返濟可申候、縱令如何様ノ儀有之候共、切月無滞返濟
可申、萬一連印ノ内故障出來候共、殘ル連印ノ者引受、無相
違返濟可申、為後日仍テ如件、

文化七庚午年十一月

何 誰 印

庄屋 年寄 誰々印

何 誰 殿

別紙證書ノ儀、米預リト書載有之處、又貢租ニ相納ル云々ノ
文意アリテ、素ヨリ融通ヲ許シタルト瞭然相見ヘ候ニ付、名
ハ預リ米ト雖モ、其實借用米同様ニ有之間、壬申第三百十七
號ノ御布告ニ依リ裁判不致候テ可然哉、

別紙預リ申御米ノ事

米三石二斗五升

右ノ米慥ニ預リ、當酉年御年貢ニ上納仕候處、實正明白ナ
リ、然ル上ハ何様ノ儀、御座候共、右急成御年貢米ニ相立候

米ニテ御座候へ、氏前書三石二斗五升少モ無滞來ル成ノ
十月中ニ、以此手形其元殿へ計渡シ相濟シ可申候、為後証
米預リ狀如件、

享保十四年酉十一月

米預リ主 何誰印
證人 何誰印

何誰殿

別紙證文ノ通、米穀賣買致シ、代金不殘相拂ヒ、其節直ニ品物
可受取ノ處、買主ノ都合ニ依リ、其儘賣主へ相預ケ置候モ、真
ノ預ケ米同様相心得可然哉、將々賣掛品滞リト見做シ可然
哉、

別紙覺

一米三十石也 但一石ニ付、銀五百二十目替

代銀十五貫六百目

右ノ米賣附申、代銀慥ニ請取申候、尤米ノ儀ハ私方ハ慥ニ
預リ置申候間、何時ニテモ御勝手ノ節、此書付ヲ以引替相
渡可申候以上、

弘化三年三月

米預リ主 何誰印
受人 何誰印

何誰殿

指令

第一條 年寄庄屋共、他ヨリ借用シタル分ハ、村入用滞リト
見做シ難タク、全ク丁卯以前ノ尋常貸借ニ付、裁判不及事、

德公指令

讀端卷一

十七

第二條 此等ノ預米ハ、明治五年第四十一號當省布達第二條ニ因リ、取上ケ裁判可及事、

第三條 預米ト可心得事、

第貳拾 滿期貨入訴ノ事 同上司法省裁判所言渡
八年同月日

原告ニ於テハ、粗漏ニシテ、明治六年八月一日以後ニ係ル地所質入ノ成規ニ觸レタリト雖モ、既ニ質地ノ年限滿期セサル上ハ、尋常貸借ノ處分ヲ受ケ、右質地代金并、利子トモ、一時ニ返辦ヲ受ケ度旨ヲ訴ヘ、被告ニ於テハ、右質地代金一時ニ償却ノ目途無之ニ付、年賦ヲ以テ返辦致シ度、且ツ利子ノ儀ハ、原告ノ勘辦ヲ受ケ度趣ヲ答ルニ據リ、判決スル事、左ノ如シ

滿期貨入

第一條 被告ノ申立ル年賦ヲ以テ、質地代金ヲ返辦致シ度トノ儀、原告ニ於テ承諾不致上ハ、採用難致、且ツ右代金一時償却ノ目途無之トノ儀ナレハ、被告身代限リヲ以テ、原告ヘ償却可致事、

第二條 被告ノ申立ル、右質地代金ノ利子、勘辦ヲ受ケ度トノ儀、原告ニ於テ承諾不致上ハ、採用難致、依テハ明治六年八月一日ヨリ起算シ、元金償却ヲ為ス日迄ノ分、一箇年百分ノ六ノ割合ヲ以テ、被告ヨリ原告ヘ償却可致事

第貳拾壹 利足日割分割ノ事 同第三十号愛知縣伺
八年同月日指令

金錢ノ利足、又ハ物品ノ損料等、一箇月金若干ト定約有之分ハ、譬ハ二月廿日借入レ、四月廿五日返濟イタス時、二月八日

利足日割

割、二十八分ノ九、三月ハ全額、四月ハ日割三十分ノ二十五、償却イタサスヘキ哉、又ハ滿二箇月ト餘ル六日ハ、日割ニテ三十分ノ六ヲ償却イタサスヘキ哉、又ハ三箇月ニ跨ルニ付テハ、滿三箇月ト見做シ、右三箇月分償却イタサスヘキ哉、

指令

一月ニ滿タサル分ハ、其月ノ日數ヲ以テ、步合可相立事、

第貳拾貳 絶家後相續ノ事

同第三十五号小田縣同八年三月七日指令

本年二月附ヲ以、戸主家族共死亡遺跡繼襲スヘキ子女無之、或ハ敗産退轉等ニテ、其家一旦斷絶及ヒ、追テ同宗或ハ他人、其祖先ノ血食ヤサルヲ憐ミ、其家名ヲ再立候時ハ、其家ノ前借前貸等ハ、一切關係可致哉、或ハ名ハ其子孫ニ當ルト雖モ、

絶家相續

實ハ全ク一家ヲ別立セシ姿ニ付云々相同ト候所、七年第四十六号十

三丁御指令ニ、其家名ヲ相續セシ以上ハ、其家ノ貸借ハ相續

ノ者ニテ引受可申事ト有之、尚又本年四月八日付ヲ以相同

候第二條ニ、凡、數十年前祖父或ハ父ノ預リ金ニシテ、祖父或

ハ父死亡シ、一旦絶家トカ、又ハ死亡ノ砌分散趣法等致シ、絶

テ舊記ノ存スルナク、即今戸主曾テ預リ金有之ヲ不知旨申

立、審判上モ知ルヘカラサル事情顯然ナレバ、祖父或ハ父ニ

テ右金員ハ相渡シ、証文ノミ残リ居リシカ、又ハ費用セシモ

ノカ、何分死亡後ニテ、其實際推糺致シ難キ者ハ、費用ト見做

シ、當戸主ヨリ追償云々之、七年第百九号御指令ニハ、一旦絶

家シタル事ノ確証之レアル分ハ、裁判ニ及間敷云々ト有之、

前御指令ニ依レハ、一旦絶家ニ及ヒタルモ、追テ其家名ヲ相續セシ者之レアル以上ハ、其家ノ前貸借ハ、相續ノ者ニテ引受可申答後ノ御指令ニ依レハ、假令家名ヲ相續スルトモ、一旦絶家シタル確証有之ハ、裁判ニ及問敷答サスレハ前後ノ御指令相抵觸スルニ似タリ、孰レニ從ヒ處分致シ可然哉、但シ前御指令ハ絶家ノ確証無之節ノ事ニテ、確証アレハ祖先ノ前借前貸預金トモ、再興ノ子孫ニ於テ一切關係無之儀ニ可有之哉、

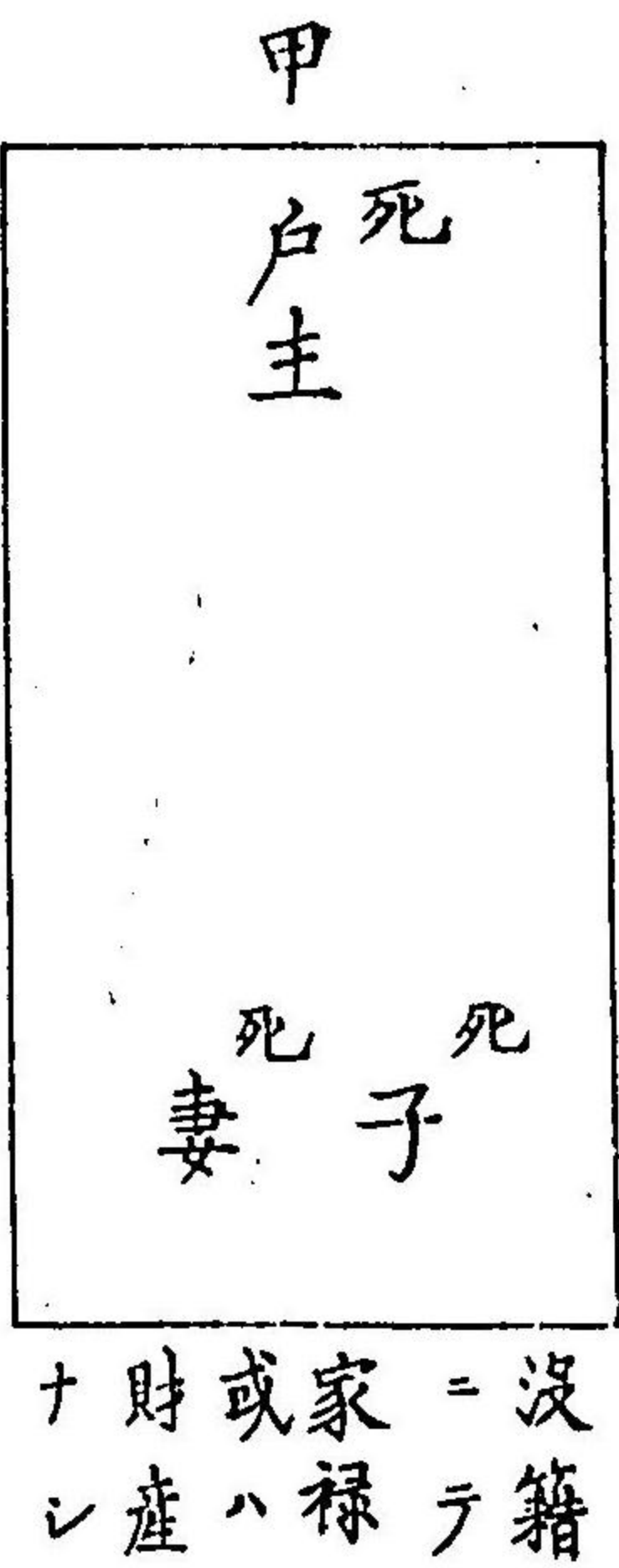
管下備中國淺口郡玉島村商三宅半兵衛ヨリ、備後國沼隈郡鞆津町商平松喜右衛門ヘ掛ル預ケ金出入訴及候處預リ主故喜右衛門ハ去ル安政五午年家族ハ明治二巳巳年中死失

シ跡相續人無之家屋敷ハ負債ノ為流質ト相成リ、一旦絶家當戸主喜右衛門ハ、同町商平松甚三郎ノ三男ニシテ、明治四辛未年戸籍御發令ニ付、故平松家ノ家名ヲ繼カシメタル儀ニテ、更ニ舊記等モ無之、預リ金有之段不存旨申立ルニ付、明治三庚午年宗門人別帳取調候所、平松喜右衛門ノ人別ハ記載無之シテ、平松甚三郎ノ三男多三郎ハ、猶甚三郎ノ籍ニアリ、左レハ故平松喜右衛門ノ家ハ、巳巳年中迄ニ一旦絶家シタルコト無相違モノト相見、當戸主ハ辛未年戸籍ニテ初メテ其名ヲ見レハ、辛未年中家名ヲ再興ヤシモノニシテ、遺産等モ無之上ハ、更ニ別家ヲ創立ヤシモ同様ノ姿ニ付、前一條ノ内、後ノ御指令ニ照準訴狀差下ケ可然乎、或ハ前御指令ニ依

リ、當戶主ハ濟方可申付義ニ有之ハ、當戶主喜右衛門ハ、未タ幼年ニテ父甚三郎ノ養育ヲ受ケ罷在ル位ノ者故、遺産等モ無之上ハ、濟方難致ハ必然ニ可有之、右ハ追テ獨立管業致シ候節ヲ期トシ、濟方可受旨申渡シ訴狀差下ケ置可然哉、決兼候間、訴答書之略相添、此段相同候也。

指令

一旦絶家シタル以前ノ貸借、及預金等其再興ヲナシタル者、關係有無ノ振合、左ノ例圖ニ参考シ、前後指令ノ意味ヲモ照合シ、訣件ノ實際ヲ審明シ、其相當ト見込ム處ヲ以テ、處分可及事。



甲 戸主曾テ刑法ニ罹リ死亡シ、其財産家禄等一切之ヲ官ニ没シ、御一新ニ係ル以其妻子モ死失シ、其家名ハ全ク断絶シタル

家名ヲ再立シタル者、後指令ノ意

乙 戸主及其妻子等、舉家死亡シ、財産退轉トナリ、一旦斷絶シタル者、其後家跡ト家祿トヲ繼襲シタル者、前指令ノ意

第貳拾三 證書取調ノ事 同第三十六号置賜縣伺 八年三月九日指令

証書

別紙証文ヲ以テ、地券訴出候處、質入書入ノ區分相立テ難ク、從來當管下ノ習慣ニテ、金穀ヲ貸借スルニ、田畑屋敷地及ヒ家土藏諸道具等、年期ヲ定メ賣券証借用証ト區別ナク、一紙ニ認メ、債主ハ差入、期限中代金返償候ハ、物品ハ負債主取戻シ、若シ返償不致候節ハ、地所ハ債主ノ名受ケニ改メ、家土藏諸道具ハ、債主ノ所有ト致シ候約ヲ定メ、多クハ舊米澤藩代官所役印又ハ町村檢斷役人ノ奥印取置候儀ニ有之、其内

別紙証書ノ如キハ、屋敷地家土藏諸道具等賣券トナシ、債主移住セス、諸掛費ヲ出サス、古証文取置カス、現物ハ悉皆負債主ニ委ニ置キ、債主ニ於テ直ニ保管セサル上ハ、債主ト負債主トノ間ニ於テハ、乃チ質物ト看做スヘキ條理無之ニ付、賣券ト稱スルモ、均シク書入ニ被存候條、丁卯以前ニ係ルヲ以テ、取上裁判ニ不及シテ可然哉

別賣券証文ノ事

一金二百二十兩也 當年ヨリ利足一箇月 四朱ニ相定メ月上ケ

御町並七步五厘 但表小間口四間半裏行二十五間 外ニ土藏木小屋内外戸立具一式

右ノ通代金借用仕、慥ニ請取申處實正ニ御座候、然ル上ハ來ル辰年ヨリ酉年迄六箇年ノ割合ヲ以テ、年々右ノ金高

ノ内ハ、三十六兩二分二朱ト二匁五分宛、御返濟可仕候、右約定通無、滯相濟候上ハ、此証文御返シ可被下候、萬々一右年期相洩、元利相滯候ハ、御勝手次第御引取可被成候、其節毛頭異議故障申上間敷候、為後年檢斷所御役印并一類立會加判賣券証文仍テ如件、

安政二年四月

借主 何 誰 印
立會 何 誰 印

何 誰 殿

表書ノ通致承知候、仍テ如件、

安政二年卯七月

檢斷 何 誰 印

追証文ノ事

去ル卯年中、別紙書前ノ通金子二百廿兩也、借用仕申處、此度年期相滿、御返濟可仕處、調達仕兼末ハ、二箇年濟當戌年半年來亥年皆濟ニ御返濟可仕様御願申上候處、御承知被成下難有仕合ニ奉存候、然ル上ハ、右年限ノ通、聊無相違御返濟仕可申候、為後日立會加判仍テ如件、

文久二戌年四月

願人 何 誰 印
立會 何 誰 印

何 誰 殿

別紙証書ヲ以テ、出訴致候處、賣掛代金ニ候ハ、共預リ金ニ引直シ候上ハ、取揚裁判可致哉、又ハ預リ証差入候共、根元商人互ノ賣掛金ニ候ハ、六年太政官第三百六十二號御布告ニ

依リ、出訴期限ノ切タル事件ニ付、訴狀下戻シ可申哉、

別証
紙

一金八百兩者 生糸代金 但通用金也

右ノ通、當六月限、無利足ニテ正ニ預リ置申處相違無御座候、右期限此手形引替御渡可申上候、仍如件、

明治六癸酉三月廿三日

何 誰 印

右兩條相伺候也、

何 誰 殿

指令

第一條 伺ノ通、

第二條 預ケ金ヲ以テ處分ス可キ事、

第貳拾四

準盜ノ事

同第五十号滋賀縣伺
八年三月二十八日

準盜

第一條 地所質入書入規則第十條ノ通、第一番ノ金主ヘ引

當ニ入レ置候事ヲ、第二番ノ金主承知ノ上ニテ、地所代價ノ

餘分ヲ見込、借添致候儀ハ、固ヨリ罪ノ問ヲ可キナシト雖モ、

若シ第一番ノ金主ヘ引當ニ入レ置クヲヲ押隠シ、二重ニ質

入書入等致候者ハ、重典賣田宅條ニ依リ、罪ヲ科シ候儀ト相

心得居候處御省日誌本年第十二號新瀉縣御指令ニ、二重書

入ノ事ハ之ヲ問ニ不及トアリ、右ハ如何相心得可然哉、

第二條 御省日誌本年第十二號京都裁判所新瀉ノ誤ヨリ盜

犯處刑ノ日、賠償ス可キ資力ナク、及ヒ賠償シテ全カラサル

者、他日賠償スヘキ資産ヲ立ルニ至リ、本土ヨリ賠償ヲ求ム

ルト雖モ、再ヒ賠償セシムルニ及ハサル哉トノ伺御指令ニ、

伺ノ通トアリ、又盜犯資力ノ有無他ノ負債ノ有無等ヲ檢定
スルハ、身代限處分ノ方法ニ依ルヘキ哉ト、伺御指令ニ、盜
贓賠償ト、負債償却ト併セ論ス可カラズ、盜贓ハ身代限ノ限
ニアラストアリ、然レモ田宅ヲ重典賣シ、或ハ私印ヲ偽造シ
財ヲ詐取スル等ノ、盜ニ準スル罪民法裁判上ニテ發覺スル
時、尋常他ノ貸借ト同ク、先ノ民法上ニテ裁判シ、若シ償却ス
可キ資力ナキハ、身代限リノ處分ニ及ヒ、然ル後斷獄課ヘ
廻シ、其罪ヲ處斷スル時ハ、前顯御指令ト抵觸ス、如何相心得
可然哉、

指令

第一條 新瀉縣伺ハ、本年一月十七日以前云々ト有之則明

治六年第十八號公布規則施行以前ノ分ニ付、前指令ノ通
タル可ト雖モ、既ニ明治六年八月一日以後ニ於テ右規則
ニ觸犯シ、二重書入ノ所業ニ涉ル者ハ、斷獄課ニ廻ス可キ
事 但シ詐偽ノ確証現然タル者ハ、明治六年第十八號公
布規則施行以前ト雖モ、斷獄課ニ廻ス可キ事

第二條 田宅ヲ重典賣シ、或ハ私印ヲ偽造シ、財ヲ詐取スル
業、准盜ノ罪、民法裁判上ニテ發覺スルモ、直ニ斷獄ヘ廻シ
處斷ス、故ニ前指令ト抵觸スルコトナシ、

第貳拾五

自己書入ヲ為シタル証書ノ事

同第五十一号埼玉裁判所伺
八年四月四日指令

東京府管下武藏國葛飾郡下令井大塚新藏代言人澤雄ヨリ
埼玉縣管下同國同郡半割村野尻吉兵衛ヘ係ル、買附米引渡

違約ノ訴及吟味候所大塚新藏ハ幼年ノ者ニテ同人父淳信儀引合新藏ハ相讓候商用金五百圓ヲ口入人有之吉兵衛ハ貸渡返償殘貳百九拾圓ヲ米ニテ差送ル答ヲ以テ猶豫致シ明治七年二月十五日積送リ時ノ相場ヲ以テ勘定可致答ハ米代前金受取証書取置候所違約相成リ吉兵衛親類ノ者ヨリ延期証書ニ差入尚違約ニ依テ新藏代言人ヨリ訴狀第一號年號及ヒ米高記載無之証書ヲ以テ明治七年八月廿七日買附米引渡違約ノ訴狀東京裁判所ハ差出ス所証書上金貳百九拾圓米代前金ト有之迄ニテ米高記載無之殊ニ年號略記ニ付裁判上證據ニ不相立旨ニテ却下相成ルヲ淳信儀被告ハ今更及掛合候所証書ハ年號米高トモ記入ハ致ス間敷ト不

遂掛合同人於テ前証書ハ自己ニ年號及ヒ米高ハ記入ノ上同月廿九日被告ハ記入致サセタル趣ニ申立訴狀第二號ノ延期記書ヲモ相添代言人ヲ以テ再訴致シ當裁判所ハ差廻シ相成リ吟味中淳信儀証書ハ自己ニ加筆再訴致ス段悔悟自首致シ新藏代言人於テハ素ト貸金ヲ以テ米買取りノ約定ヲ為スハ無相違吉兵衛親類ノ者ヨリ米代前金返償ノ對談書モ有之假令吉兵衛ヨリノ証書ニ年號略記ニ候モ貳百九拾圓ハ相當ノ利息ヲ加ヘ返償請取度旨被告於テハ貳百九拾圓ノ負債ヲ米ニテ返償ノ約定致スヲ証書ハ原告於テ自己ニ年號及ヒ米高ヲ記入シ金高五百圓ト為シ訴フルハ詐偽ノ所業ヲ以テ貳百圓餘ノ申掛ケヲ為サレタル故今般ノ詞

訟ニ付、訟庭於テ示談返償ハ難致旨申争ヒ、右金主新藏ハ、幼少ノ者ニテ、最初金子貸渡ヨリ、証書ハ加筆出訴等ニ至ル迄都テ父淳信取扱、同人自首スルモ、全ク他人ノ作為スルトハ為シ難ク、金主同一ノ者ナレハ、其証書ハ約定ヲ遂クル權利ヲ失フモノトナシ、且、証書ハ米高ヲ記入、代價ヲ積リ、貳百九拾圓ノ証書ヲ以、米八十石ヲ五百圓ニテ買取ラントナシタルハ、條理ニ於テ為スヲ不可得所業ニ付、左ノ通裁判致シ、大塚淳信ハ、斷獄課ヘ廻シ、相當處分及、可然哉、

其方共、訴訟吟味ヲ遂ル處、被告野尻吉兵衛儀、原告大塚新藏ヨリ、金五百圓借受、返償殘リ二百九十圓ヲ米ニテ可差送答約定致シ、米代金請取書、大塚新藏宛ニテ相渡ス段ハ、原被告

申口符合致スト雖モ、其証書年號ヲ略記シ、且、米高記載ナキヲ、裁判上證據ニ不相立、新藏父大塚淳信儀、野尻吉兵衛ヘ年號米高等記載ノ儀、今更掛合及フモ、記入致ス間敷ト、想像ヲ以、同人ハ、不遂掛合、其証書ハ自己ニ年號、及ヒ米高ヲ記入、大塚新藏代言人ヲ以、出訴吟味中、大塚淳信儀、自己ニ証書ハ加筆セシヲ悔悟自首スルト雖モ、最初金子貸渡シヨリ、訴ヲ起ス迄、都テ同人ノ為ス所ニシテ、証書ハ加筆スルハ、他人ノ作為スルトハ為シ難ク、金主同一ノモノナレハ、其証書ハ約定ヲ遂クル權利ヲ失フ者ニ付、裁判上證據ニ不相立事、大塚淳信儀、右証書二百九拾圓米代前金ナルヲ、自己ニ米高記入相場ヲ定メ、金五百圓ヲ以、米八十石ヲ買取ント為シ

タル庶ハ、仍ホ其筋ノ吟味可受事、

訴訟入費ハ、原告人ヨリ償却致ス可シ、

右一件書類之略相添、此段相伺候也、

指令

証書面ノ金額、被告ノ負債ニ無相違旨、原被告口供符合致ス
上ハ、濟方申付、年號及ヒ石高記入ノ庶ハ、斷獄課へ可廻事、

第貳拾六 出訴期限第三條處分ノ事 同第五十二号濱松縣同
八年同月日指令

出訴期限

出訴期限規則第一條第二條ニ属スル淹滞金等ヲ、尋常預金
貸金ノ証文ニ改メタルハ、同規則第三條ノ出訴期限ヲ以テ、
受理ス可シト雖モ、左ノ証文面ノ如キ詞訟ハ、賣掛金ノ出訴
期限ヲ以テ採揚哉、又ハ貸金ノ出訴期限ヲ以テ採揚哉、但

左ノ証文ニテ、利足ノ定メ無之キハ、無論賣掛金ヲ以テ論ス
可キ哉、

借用申、金子ノ事

一金何百圓也

但、利息年何割

右ハ、貴殿方へ何品何程賣渡シ、代金正ニ請取申候、仍テ本
日右品御引渡可申處、品物出來兼御渡可申様無之ニ付、代
金悉皆返濟ス可ク處、調達致シ難ク、前書ノ金額令般借用
致候儀、實正也、但シ何年何月何日元利共急度返濟可致候、
為後証一札如件、

年月日

何ノ誰

何ノ誰殿

右御指令有之度相同候也。

指令

利足ノ有無ニ拘ハラズ、出訴期限規則第三條ニ依テ、處分可及事、

區入費

第貳拾七

區入費等身代限ノ事

同第五十三号福岡縣同八年四月五日指令

凡ソ人民區入費、及ヒ村入費、出金淹滞ノ者ハ、貢租未納ノ者同様、外負債ニ關係ナク、身代限處分及ヒ可然哉、但本文不足スルトキハ、不足金ノ証書ヲ、區長或ハ戸長宛ニシテ、相渡サシメ、追テ身代持直シ次第取立ツヘキ旨、裏書ヲ下附シ、其不足金員ハ、假ニ區内、又ハ一村中へ賦課支消セシメ、追テ負債者ヨリ取立濟償還為致可然哉、相同候也。

指令

貢租未納同様ト見做ス可ラス、平常身代限ノ處分ニ及ヒ、外負債主ト金高割ヲ以テ配當可致事、

但書証書認方ノ儀ハ、伺ノ通相心得不足ノ分ハ、其筋ハ可伺出事、

第貳拾八

賃入レ證書ノ事

同上京都裁判所同八年同月日指令

賃入

明治六年第十八號御布告、地所賃入書入規則第十四條ニ當今賃入又ハ書入イタシ置、年季中ノ分ハ、總テ前文規則ニ照準シ、當七月限リ証文相改ム可キ事ト之アルニ依レハ、其御布告以前ニ契約シタル地所賃入書入金穀貸借証文ニシテ、其期限ノ八月以後ニ係リタル者、七月限リ之カ書改メテナ

サスシテ、八月以後満期ノ日ニ至リテ、其返済ヲ訴フルニ於
テハ、尋常貸借ノ處分ニ及フヘキハ、固ヨリ言ヲ族タサレ
若、其金穀返済ノ訴ヘヲナサスシテ、其証書ノ規則ニ觸ル
所アルヲ以テ、規則ニ依リテ之ヲ改正セシメテ、訴ヘヲナス
トキハ、其期限ノ満未滿及ヒ無期限ノ者ニ論ナク、受理シテ
若シカラサル乎、

指令

改正ヲ怠タル証書ヲ以テ、今日ニ至リ、其証書ノ年期三年ニ
過キタル者ヲ、其儘ニ書キ改テ求ルルヲ訴ル權ハ、素ヨリ
ル可ラス、獨、其証書ヲ以テ、従前貸入又ハ書入ノ貸借ナル
ノ証據トシテ、現今ノ規則ニ觸レサル様改テ三箇年以内ノ

身代限後
利息

貸入、又ハ書入新証文ヲ求ムル訴ハ、受理若シカラサル事、

第貳拾九 身代限リ後利息ノ事 同上東京裁判所同
八年同月日指令

凡金穀貸借等、其他ノ訴訟ヨリ起リ、負債主身代限(裁許又ハ
示談)ヲ以テ、及償却所有品糶賣ノ金額債主請求ノ金高ニ不
引足、請人アラハ請人ニ係リ、追訴ニ及ヒ、同斷身代限ヲ以テ
スルトキ、其所有品糶賣ノ金額モ、亦不引足、依テ如成規、証書
ハ裏書ヲ與フ、而シテ數十年ノ後ニ至リ、負債主或ハ其相續
人業漸ク身代持チ直シ、債主或ハ其相續人再ヒ及、出訴時、業
ニ裏書ヲ與ヘシ年月日ヨリ、其利子ヲ計算スレハ、其金高元
金ノ高或ハ裏書金高ヨリモ、幾數ノ加倍ニ至ルモ知ルヘカ
ラス、然ルヲ譬ハ、証書中ニ一日幾分ノ利息、即チ日賦ノ利足

アリ、又ハ証書中ニ返濟期限違約ノ節ハ、利子ノ外、其期限翌日ヨリ、一日ニ付、約違償金トシテ、金高ノ一割、或ハ五分可相渡約定アリ、又ハ証書ニ利足無之モノト雖モ、御法ニヨリ、債主ノ催促ヲ受ケシ日ヨリ、利足ノ生スル者アル等ノ類、是カ皆濟ヲ致サシムルニ於テハ、負債主及ヒ其相續人等、何ノ日カ再ヒ家産成立ノ期ヲ得、此負債辨濟スル途アラシ哉、依テ利子ヲ算計スルハ、始メ訴ヘシ裁判結局ノ日迄ニ止メ、身代限り申渡ノ日、身代分散証書ニ、裏書ヲ與ヘシ後チ、再訴ニ及フ時ハ、其裏書ノ金額ニ止メ、利子ヲ算計セスシテ可ナラシキ、若シ果ノ然ルトキハ、當初契約ヤシ所ノ債主、利子ノ要スヘキ權モ、其處分後ハ消滅ヤシ、之レ其理ノ生シ來ル所以、未

クテ得タリト云ヒカタキ所アリ、故ニ元來ハ暫ク訴訟期限則ニ照準シ、其間法律上ニ定マル所ノ百分五ノ利子ヲ加フルモ、亦可ナラシキ、相侖候也、

指令

一旦身代限、處分濟ノ上ハ、利息ノ計算ヲ為ス可ラス、尤後日本人身代持直シタルヲ以テ、出訴及ヒクル時ハ、其日ヨリ再度証書面約定ノ利息ヲ起算致ス可キ事、

第三拾

揭示後訴出ル貸金ノ事

同第五十五号鳥取縣伺
八年四月十二日指令

昨明治七年十二月五日附ヲ以テ、金穀ヲ借り返濟ヲ為ス能ハサル者、身代限ノ處分ヲ為スニ當リ、御規則ノ通六十日間揭示中、一人モ訴出ル者無之、己ニ財産分散ノ場合ニ至リ、外

揭示後
貸金

一人ノ債主、家屋質入ノ証書ヲ以テ訴出ル者アリ、右ハ六十
日内訴出サルヲ以テ、他ノ債主ニ對シ、先取ノ特權ヲ失フ者
ヲ以テ論シ、質入ナキ貸金ノ處分ヲ為シ可然哉、或ハ六十日
ヲ過キ訴出ル者ハ、凡テ不採上方ニモ候哉ノ旨相伺候處、諛
証書ハ原約期限未滿ニ有之哉、又ハ期限未滿ノ者ニ有之哉、
事實ヲ以テ可伺出旨御指令ノ趣承知仕候、右ハ去ル明治四
年未六月中貸付、同年十月限、返濟ノ約定ニテ、前條六十日間
ノ揭示ハ、昨七年十一月中ノ事ニ有之、期限已滿ノ証書ニ候
間、何分ノ御指揮被下度候也、

指令

揭示日限ヲ過キ訴出ル者ハ、此度ノ割賦ニハ不差加事、

証書改メ

第三拾壹 戌辰後書改タル証書ノ事

同第五十八号和歌山縣伺
八年四月十五日指令

華士族平民已巳六月二十五日、丁卯十二月晦日以前ニ、動産
不動産ヲ入質致サ、ル貸借米金ヲ、已巳六月二十六日、戌辰
正月以後更ニ約ヲ改メ、無利息預リ証書ヲ取替置キ、此金返
辦淹滞ニ付、出訴ニ及フ者アリ、右ハ七年一月十日東京裁判
所ヨリ、丁卯十二月晦日以前ノ貸金ニテ、戌辰正月以後金主
ハ質物ヲ受取り、質入証書ニ書改メタルハ、取上及裁判然ル
可ク哉ノ伺ニ、伺ノ通リト御指令有之ニ依レハ、是亦更ニ約
ヲ改メ、其証書ヲ取替セタル上ハ、新夕ニ預リタルモノト見
做レ、採上ク相當濟方申付可然哉

指令

採上裁判不及事

第三拾貳

隱居ノ負債ノ事

同第六十三号青森縣伺
八年四月二十五日指令

戸主中ノ負債返辨滞リ、隱居後、債主隱居セシ者ヲ相手取り、及出訴候節ハ、假令隱居ト雖モ、存生スレハ昔日ノ戸主タルヲ以テ、同人へ濟方申付、辨償不相調節ハ、一身所有ノ財産ヲ以テ、身代限り迄ノ所分及ヒ、尚不足スレハ現今相續ノ戸主へ、償却可申付、又ハ負債主存生ト雖モ、已ニ隱居セシ上ハ、直ニ戸主へ係リ、出訴及ハセ可然哉、由訴ノ者有之難決ニ付、此段相伺候也、

指令

現今相續ノ戸主へ、償却可申付事、

身代限

第三拾三

身代限リノ事

同第六十四号山梨裁判所伺
八年四月二十五日指令

第一條 負債者身代限、揭示中、失踪シタル時ハ、直ニ家族ノ者呼出シ、財産賣拂ハセ、割賦ノ執行致サセ可然哉、若シ然ラハ本人失踪ノ後ニ訴出ルモノハ、其証書ヲ驗真スル能ハサルニ付、分散ノ割賦ニ不差加候テ可然哉、

第二條 負債者土地家屋等ノ物件引渡方違約ニ及ヒ、債主ノ訴訟ヲ受テ、引渡期日ヲ裁判所ニ於テ誓ヒタル後本人失踪シタル節ハ、直チニ家族ノ者へ、引渡方申付可然哉、

指令

第一條 家族ノ者へ、財産賣拂ヲ申付ルニ不及、失踪ノ日ヨリ百八十日相立タル上、規則ノ通、糶賣又ハ入札拂ノ手續

ニ取懸ル可シ、且、本人失踪後ト雖、六十日揭示中、出訴ノ者ハ百八十日相立タル上、跡相續ヲ為ス可キ者ハ、証文ノ真偽ヲ見届サセ、無相違分ハ、其節ノ割賦ニ可差加事、

第二條 金穀出入ト、其他ノ事件トハ、譯柄同シカラサルニ因リ、裁判ノ筋合モ、自ラ異ナル可キ都合モ之レアリ、且ツ裁判所ニ於テ期限ヲ誓ヒシトハ、解訟ヲナシタルカ、又ハ審問中日延猶豫ヲ願ヒタルカ、事實不分明ニテハ、指令難及ニ付、訴狀ニ口書手續書ヲ添、可伺出事、

第三拾四

御雇人請求ノ事

同第六十五号司法省裁判所言渡
八年四月二十四日

御雇人

原告英國人 ショントーマス
ハーデー 代理人 同國人

モンデグーコルグート

被告日本政府地、理察、代、言、人

英國人

ガウインビー、ネ、ス

談訴ニ請求スル金高三千貳百貳弗、外ニ固有ノ名譽ヲ汚シタル旨ヲ以テ、其償金八千弗、都合壹萬千貳百貳弗ヲ請求シタリ、仍テ遂、審問處、左ノ通、

第一條 談訴審問ニ付、雙方ヨリ顯ス處ノ證據、本訴ニ緊要ナリト認メタル箇條、左ノ如シ、
一原告ニ於テ奉職以來、免職ニ至ル迄、休職シタル日數ノ許多ナルヲ、及ヒ醫官ノ証書ト、長官ノ許可ナクシテ休職シ、又

ハ擅ニ横濱等ニ至リ、職業ヲ怠リタルノ屢ナルハ、原告人ノ口供、及ヒ地理寮日記上ニ、其証據瞭然タリ、一原告ニ於テ官ノ簿冊へ、猥ニ自己ノ苦情ヲ書シ、及ヒ雪隠ノ事等記載セシ事、

一千八百七十四年、我明治七年六月十三日ノクワイーンヨリ、原告ニ對シ、從來職業ノ不充分ナルヲ、及ヒ往復文章、失体ヲ督責シタル事、

右ノ外、雙方ヨリ申立ル箇條許多ナリト雖モ、本訴ニ緊要ナリト雖モ、証據顯レサルモノハ、採用セサル事、

第二條 原告ヨリ申立タル被告ニ於テ、條約取消ノ期限、報告ノ約ニ違ヒタリトノ趣ハ、該條約第十五節ニ記載セル三

ケ月前、預メ其旨ヲ當人へ報告シ云々トアルハ、雇人ニ於テ、條約ニ悖戻シタル時ノ事ニ關セス、畢竟雇主ノ都合ニ依リ、條約ヲ取消ス時ノ謂ニ之アリ、乃チ同節中此時ニ及ヒ、同入儀此條約取戻ノ事實ヲ問フヲ得サルヘシトノ明文ニテ判然タレハ、右申立ノ趣ハ本訴ニ不適當事、

第三條 該條約書ノ全文ヲ熟考レ、本訴ニ緊要トスル箇條ヲ辨別スルニ、第五節ニ疾病變故アル節ニテモ、醫官ヨリ証書ケルニ非レハ、其出勤ヲ關ヘカラス云々、又第八節ニ不行狀不正、妄ニ乱醉シ、或ハ條約ノ箇條ニ違戻スル等ノコトアレハ、黜職シ、此條約ヲ取消ス云々、又第十三節末文ニ、同人不法ノ舉動、或ハ酒狂其他不行狀アルカ、然ラサルモ此條約面

ニ違背スルコトアル時ハ、黜職ノ外、尚過料金を科ス云々、又第十四節ニ、若シ断リナクシテ、職事ヲ休ミ、或ハ病氣ノ節、醫師ノ證書ヲ差出サスシテ、出勤ヲ闕ク時ハ、一日毎ニ十弗ツ、ヲ科ス云々、右四條ニ對シ、雇人ニ於テ一ツモ違犯ノ事アル時ハ、條約違犯ト看做サ、ルヲ得ス、然ルニ原告ニ於テ、第一條ニ顯ル、所ノ舉動アルニ依リ、條約第五節第八節第十三節第十四節ヲ履行シ、免職及ヒ償金等ヲ以テ處分スルコト、則雇主ノ特權ナリト認メタリ、

第四條 前條ノ通之アル間、原告於テ被告ヘ對シ、免職後ノ給料、又ハ償金を請求スルノ權利無之モノト裁決セリ、

第三拾五 質地ノ事

同第六十八号山梨裁判所同
八年四月三十日指令

質地ノ儀ニ付テハ、追々公布及ヒ御布達ノ旨趣モ有之、從前質地ヨリ起ル訴訟ハ、壬申二月十五日以前ニ由リ、或ハ流地トナリ、或ハ糶賣トナリ、或ハ年期中、其証書を改メサルモノハ轉シテ尋常ノ貸金トナリ、或ハ癸酉七月三十一日前ニ期限ヲ經過セシモノト雖、債主延期勘辨ヲ加ルモノハ、甲戌十月迄ニ証書を改メサレハ、裁判上糶賣分配ノ時ハ、先取ノ權利ヲ失フモノトナル、其法愈出愈密ニシテ、實際或ハ惑ヒナキ能ハサルモノアリ、故ニ今其區別ヲ立テ、以テ疑ヲ質ス、左ノ如シ、

明治七年第七十六號公布中、明治六年七月三十一日前ニ、期限ヲ過キ去リタルトアルハ、蓋シ壬申二月十五日前後ノ別

ナク、廣ク丁卯以前ニ係ル辭ナラン、然ルニ債主ニ於テ、延期
 勘辨ヲ加ヘタルノ証ナキモノハ、明治六年第五十一號公布
 但書ニ依リ、流地ノ裁判ヲ為サル可ラサルニ似タリ、然ラ
 ハ則前約満期ノ節、繼添証書、或ハ對談書ノ類、債主ニ於テ延
 期勘辨ヲ加ヘタルノ確証アリテ、甲戌十月三十一日迄ニ、其
 証書ヲ改メサルモノニ限り、特權ヲ失フ可キモノト看做ス
 ヘキヤ、且ツ裁判上糶賣配分ノ時ト有之ハ、蓋シ數債主權利
 ノ輕重ヲ較量スルノ時ナルヘシ、然ラハ則債主只一人ニシ
 テ、現ニ其地所ヲ進退スルモノ、獨リ其証書ヲ改メサルノミ
 ヲ以テ、元地主ヨリ受戻シテ訴フルト雖、前約據ルヘキノ
 証アルハ、債主ヲ以テ特權ヲ有スルモノト為シ、壬申二月

十五日前ノ分ハ流地、同十六日後ノ契約ニ係ルハ糶賣迄ノ
 法ヲ盡シ、元金ヲ受取ラシムルニ止マリ可然哉、又ハ債主多
 寡ト、壬申二月十五日ノ前後ヲ問ハス、明治七年十月三十一
 日迄ニ、証書ヲ改メサルモノハ、總テ特權ヲ失フモノト為シ、
 尋常貸借ノ處分ニ及フヘキ哉、奉伺候也、

指令

明治六年七月三十一日以前ニ、定約期限過去ルト雖、實際
 未タ流地ニナラスシテ、依然質地ヲ以テ、据置タル分、同七年
 十月三十一日迄ニ証ヲ改メス、舊証書ノ儘同十一月以後ニ
 訴出タル分ハ、尋常貸借ノ處分可及事、

第三拾六

預リ證ノ事

同第六十八号大分縣伺
 八年同月日指令

預リ証

第四號ノ通ノ証書ヲ以テ出訴セリ、其証書面ハ紛レナキ預金ナリ、然ルニ其根元ハ、芝居ノ受負金ニシテ、已ニ芝居ヲ終レ氏、其金ヲ渡サ、ルヲ以テ、遂ニ預リ証文ニ為致タル旨申立タリ、是又預金ヲ以テ處分ス可キ乎、將受負金ヲ以テ處分ス可乎、相伺候也、

第四預證號

一金百五十兩一分也

右ノ通體ニ預リ申候、御用ノ節ハ何時ニテモ返上可仕候仍テ証書如件

慶應三年卯三月

某 殿

某 印

年期金

指令

預リ証文ヲ以テ、處分ス可キ事、

第三拾七

年期有無預ケ金ノ事 同上福岡縣伺
八年同月日指令

凡、無利足ノ預ケ金穀ハ、証書上返濟期限ノ有無ニ拘ハラズ、幾數十年前ノ分ト雖、取上裁判スヘキ事ト心得居候處、昨七年御省日誌第百七號堺縣ヨリ伺ノ御指令ニ、証書面年期無之分ハ伺ノ通ト有之、右年期ト云ハ、返濟期限ヲ指シタル儀ナル乎、若シ然ラハ一昨六年御省第四十三號御布達ノ如ク、預リ金穀ト雖モ、返濟期限ヨリ利足ヲ生ヌルモノニ付、返期丁卯以前ニ在ルハ、貸借同様ト見做シ、採上裁判セサル儀ニ御座候哉、疑儀ヲ生シ候間、相伺候也、

指令

年期限ノ有之分_ニ、出訴期限内ニ訴出ルトキハ、採上裁判可及事

第三拾八 負債二件 同第七十号高知縣令
八年三月二十四日指令

負債

第一條 身代限ニ付、抵償品代價分賦致シ、不足金アリテ新規証文ニ書改メタル時ハ、以後無利足タル可キ哉

第二條 家族ノ者、自分一己ニ金穀借受証書ニ戸主ノ調印無之者ハ、假令父子妻妾ノ負債ト雖モ、其家ノ財産ヲ以テ償却可致筋無之哉

指令

第一條 新規証文ヲ書改ムルトハ、租税村入用及賣掛金等

ノ如キ、本証書ナキカ、又ハ諸帳簿上ニテ取引シタル類ニテ、出訴後濟方ノ裁判及ヒ、不足ノ分ヲ新規証文ニ作為シタル_トカ、左スレハ新証書ノ通り可心得、尤_モ通例元証書アル_分、其不足ノ分ハ、直ニ元証書ニ裏書ス可キ答ニ付、即チ元証書面約定ノ通可心得事、但シ負債者身代持直シタルヲ以テ、債主再度請求ノ訴ヲ為シタル日ヨリ、本條ノ利息ヲ請求スル權ヲ生ス可キ事、
第二條 負債者一人ノ所有物ヲ以テ、身代限ノ處分、及_テ可キ事、

第三拾九 年號略記ノ事 同第七十一号高知縣令
八年五月三日指令

貸金名宛並、年號無之証文ハ、取上ケ申間敷哉ノ旨、去_レ壬申七

年號略記

月二十二日鳥取縣伺、伺ノ通ト御指令有之ニ依リ、當縣ニ於テモ、以來右ニ照準取扱來候處、本省日誌本年二十號、山形縣ヨリ年號ヲ略シ、干支ノ記シタル証書中云々、明治六年七月以前ノ証書ナルヲ以テ、尋常ノ通、受理可致乎ノ伺ニ、伺ノ通ト相見ヘ、右ハ一件兩岐ニ涉リ、何ヲ援引可然哉、鳥取縣ヘ御指令後、果シテ御再議ニ候ハ、既決裁判ノ分ハ更ニ受理不及可然哉、相伺候也、

指令

年號ヲ略スル時ハ、其約定ヲ取結ヒタルヲ、何年ノ何月日ナルヲ証明スルニ足ラサル故、従前採上ケサル習慣ニテ、乃チ鳥取縣ヘ指令ノ意之レナリ、尤年號ヲ略スルモ、干支ヲ記

載シアレハ、其干支ヲ以テ年號ヲ推算ス可キ道アルヲ以テ、干支ヲ記載シタルハ、年號ノ代用ト看做シ、採上ク可キ活用法アリ、乃チ山形縣伺ヘ、指令ノ意之レナリ、此ノ如ニシテ兩縣ヘノ指令、抵觸スルヲ非サレハ、従前ハ右兩縣指令ノ通心得可キ事、

第四拾

出訴期限ノ事

同第七十二号濱田縣伺
八年五月四日指令

當管下邇摩郡宅野村藤間太郎ヨリ、那賀郡濱田町鳥羽常吉同苗登三郎ヘ係リ、別紙証書寫之ヲ以テ、代金淹滞ノ義訴出

出訴期限

候處、銑代金ノ儀ハ、商人相互ノ賣拂金ニテ、証書面明治七年五月ヨリ四箇月延トアルニ依リ、同年八月ヲ約定ノ期限トナシ、已ニ出訴期限ヲ過去候ニ付、取上裁判ニ不及候得共、右引當トシテ戸長ノ奥書割印ナキ、地券狀三通差入有之ニ付、地所質入書入規則第九條ニ照シ、質入書入ナキ金穀貸借リ處分ニ及可然哉、此段相伺候也、

指令

原被告約定ノ相場取極メタル日並ニ、今般出訴及ヒタル日限等、分明ナラサレハ、指令及ヒ難キ儀ナレ共、本件ノ如キハ賣懸金ヲ求メタキトノ訴ニシテ、假令ハ明治七年五月十五日ヲ相場取極メタル當日ト定メ、延約定ノ四箇月ヲ計算ス

ル時ハ、乃チ九月十五日ヲ以テ、約定満期ノ日トナシ、出訴期限ヲ起算スレハ、翌年三月十五日迄ハ出訴期限ヲ失ハサル儀故、其期限内ニ出訴及ヒタル時ハ、受理可及、若シ翌年三月十五日後ニ至リ、出訴セシメナラハ、出訴期限過去リタル者ニシテ、受理不及筋ナリトス、右振合ニ照準シテ處分可及事、

賣買

第壹 豆板銀竊賣ノ事

司法省日誌第一号京都裁判所伺
八年一月七日指令

豆板銀

戊辰五月及ヒ同七月兩度ノ御布告ニ背キ、通用停止ノ丁銀
豆板銀ヲ竊ニ賣買シ、或ハ典賣ヲ以テ融通致ス者之アルニ
依リ、嚮ニ京都府ニ於テ吟味ノ末、當裁判所へ引送ニ相成候
處、其内病囚モ之アリ追々詰問ニ及ヒ、本年七月迄ニ違令輕
重ニ問ヒ夫々處分致シ候、然ルニ司法省日誌本年第四百十
一號滋賀縣伺ニ、右銀賣買等致シ候者一概ニ犯禁ノ者トモ
難見做云々、不問ニ置候テ可然哉ニ伺ノ通、御指令相見、右
ハ其滋賀縣ノ伺、詳ニ了得致サスト雖モ、其御指揮ノ旨趣ヲ
推察スル處、畢竟當八月大藏省ヨリ右銀ノ儀ハ一般ノ地金

ト見做スト、更ニ布達之アルニ依テ、同月以後ノ賣買ハ問フヘキモノニアラストシテ、右ノ通御指令ニ相成候儀ト考ヘラレ、若然レハ其七月以前、其兩度ノ御布告改ラレル内、潜ニ賣買等致シ融通セシムルノ罪犯ハ、違令ノ處置相當ト存候ヘ共、疑惑ヲ生シ候間、此段相伺候也。

指令

地金同様目方ヲ以テ賣買セシ者ハ、大藏省布達以前ト雖モ、不問ニ置クヘシ、

第貳 出訴期限ノ事

同第六号栃木裁判所同
八年一月十三日指令

出訴期限第二條、商人ヨリ商人ニ非サル賣掛金トハ、互ノ商賣品ニ非サルモノヲ云儀ハ不俟論然ルニ農ニテ有徳ノ米

出訴期限

ヲ穀屋へ賣リ、士族ニテ有餘ノ刀劔ヲ、刀屋へ賣レ代金滯等ノ訴ハ、互ノ商賣品ニ非サレバ、夫ノ刀屋ノ食料ノ為メ、農ヨリ米ヲ賣リ、士族ノ有用ノ為メ、刀屋ヨリ佩劔ヲ賣ノ如ク、必用ニ應スル儀ニ無之ニ付、商業互ノ賣買ノ如ク、互ニ利スル所アルモノトナシ、商人互ノ賣掛ニ比准シ、六ヶ月ヲ期限トナシ可然哉又ハ互ノ商業品ト云ニハ非サルニ付、商人ヨリ商人ニ非サル賣掛金ノ反對ヲ以テ出訴期限一ケ年ト相定メ可申哉

指令

出訴期限ハ、商人ヨリ商人ニ非サル者へハ、賣掛代金ニ比準スヘキ事

無証據

第三 無証據ノ事

同上山口縣伺
八年一月十五日指令

六年太政官第三百六十二號出訴期限規則中、旅籠料飲食料職人手間代金日雇ノ給料、芝居木戸錢、男女藝者ノ揚代金、醫師ノ診察及ヒ藥料、多クハ前以テ、証書差入置、類無之、償却不將ノ節ハ、証書取付ノ上可訴出譯ニモ之アルヘク候ヘ共、訴訟ニモ立至ル可キ場合ニ於テハ、多ク故障申立、証書不相渡者モ有之、此等無証據トシテ採用セサル片ハ、差向迷惑ノ者不勘ニ付、對決ノ上相違無ク段申出ルニ於テハ、無証據ト雖モ、取揚裁判シ可然哉、

指令

民法裁判上ニテハ、無証據ノ訴訟ハ、取上サル事、

奉還証
賣買

第四 奉還証賣買ノ事

同第十一号岡山縣伺
八年一月十九日指令

家祿奉還未タ聞届サル以前、資本金ヲ引當ニ致シ、他人ヨリ金錢借請候者、後日濟方相滞及告訴候節ハ、壬申第三百號布布ニ基キ、不及裁判ハ勿論ト差心得候ヘ共、既ニ奉還聞届濟ノ者、資本金下與無之以前、其資本金ヘ幾分ノ利ヲ計リ、他人ヘ譲リ渡ノ契約ヲ遂ケ、被讓人ヨリ利分ヲ除ク金員讓主ヘ相渡候末、資本金下與ノ際ニ至リ、違約ノ詞訟ニ及トキハ採上及裁判可然哉、

指令

伺之通

第五 地所賣買ノ事

同上敦賀縣伺
八年同月日指令

德公指令

續篇卷一

當縣管下越前國南條郡白崎村農大友甚兵衛所持ノ田地一
 反歩、去明治二己巳年十月同村畔高勘右衛門へ、舊福井藩札
 銀三拾貫匁ニ賣渡シ、右銀勘定不足ノ分本年十月三十日別
 紙証文^器ヲ以、田代殘金催促ノ儀ヲ訴フ、右ハ去壬申年太政
 官第五十號御布告地所永代賣買被差許候以前ノ田地賣買
 ニシテ、質流地又ハ貸借ニモ無之証文面ニ、田代不足銀令明
 日中ニ、勘定云々ノ旨記載有之上ハ、日付無之ト雖モ、十月一
 箇月ヲ踰越ス可ラサル約定ノ期限ト相見ヘ、何時ニテモ杯
 云フ無期ノ比類ニ非ス、且地所賣買犯禁ノ儀ハ不問ノ事ニ
 モ有之ニ付テハ、田地賣買殘金ニ係ルヲ以テ、昨六年第三百
 六十二號御布告、出訴期限規則第一條商人五ノ賣掛代金ト看做

シ、同第五條從前取結ヒタル條約ニテハ、六年十二月三十一
 日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ、右同日ヲ條約ノ期限
 トシ、出訴期限ヲ起算スルカ故ニ、出訴ノ日既ニ六箇月ヲ過
 去リ、所謂自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ、取上裁判及ハ
 ス候テ可然哉、但レ右証書ノ如ク己十月トノミ記載ニ、年
 號等記載無之類、昨六年第二百十二號御布告以前ハ、總テ裁
 判上証據トナシ、採上可キ哉ニ候得共、原被告ノ間年號新故
 ノ紛議ヲ生シ、他ニ証據トスル書無之際ニ至リ、不都合ニ付、
 舊幕府規則百箇條中年號宛所無之証文ハ、無取上トアルニ準
 シ、証據ニ不相立トシ、採上裁判不及候テ可然哉、

指令

地所ノ賣買ハ商人相互ノ期限ヲ以テ論ス可キ者ニ無之ニ付、採上審問ノ上、相當處分可及事、

第六 賣買淹滞ノ事

同第十二号名東縣同
八年一月二十二日指令

相互ニ米ヲ賣買シ此代金淹滞ニ付、賣買セシ日ヨリ六箇月ノ時間ヲ過キ之ヲ訴フ原告者云、被告買フ所ノ米、一半ハ轉賣利益ヲ得タルヲ判然ニテ、則商人相互賣掛金出訴期限過タルモノナレズ、其一半ハ食糧ニ供セシモノニ付、商人ヨリ商人ニ非サル、賣掛金出訴期限一箇年ノ時間ヲ過サルモノナレハ、其一半ノ代金ヲ請求スト、被告者ハ原告ノ言ノ如シト答フ、如斯申口符合スル時ハ、其一半代金ノ裁判ノ執行候テ不苦ト存候、

賣買淹滞

若シ右ノ如ク申口符合セス、原告一半ヲ食糧ニ充シト云ヒ、被告ハ悉皆轉賣セシト云ヒ、他ニ證トナスヘキモノナキ時ハ、原被平生職業如何ヲ思量シ、其時ノ景況ヲ考ヘ、至當トスル處ヲ以テ裁判可致ト存候

指令

第一條 同ノ通、

第二條 實際ヲ審明シ、其見込ム所ヲ以テ裁判可及事、

第七 公債書犯則ノ事

同第十六号長野縣同
八年一月二十八日指令

新舊公債証書發行條例中御改正增加第八節ニ、都テ讓渡シ賣買等此手續ヲ厭ヒ候欤、或ハ心得違ニ候共相對ノ取引ヲ為シタル時ハ、其金高三割ノ罰金ヲ申付可ク云々ト有之ハ、

公債書

勿論雙方へ科シ候儀ト存候得共、為念相伺申候也、

指令

伺之通

第八 出板ノ事 同第三十号兵庫裁判所伺
八年二月二十七日指令

爰ニ甲某神戸ヨリ大坂ニ至ル鐵道里程ヲ測量シテ、沿道ノ
橋數及ヒトン子ルスデーシヨンノ布置等明細繪圖ヲ作り、
上ニ發車賃錢表ヲ加ヘ彫刻シテ一枚摺ニ製シ、文部省ノ免
許ヲ得テ發賣スル者アリ、然ルヲ乙ノ寫真師其圖書共ニ寫
真ニ製シ販賣スルアリ、甲ハ之カ為ニ已レカ專賣ノ利ヲ害
スルヲ以テ、出版條例第九條他人藏版ノ圖書ヲ私ニ翻刻ス
ルニ照シ、其販賣ヲ禁シ、且寫真種版共沒官セント請求ス、原

出板

來出版條例ハ出板ノ規則ニシテ、寫真ヲ以テ翻刻スル者ニ
擬シテ處シ難シト雖モ、同條例第三條圖書ヲ出板スル者ハ
官ヨリ之ヲ保護シ、專賣ノ利ヲ得セシムルノ條ニ據レハ、寫
真ヲ以テスルト翻刻ヲ以テスルト、其專賣ノ利ヲ害スルハ
同一ナレハ、甲ノ請求ノ如ク、乙カ販賣ヲ禁シ、其寫真種版共
沒官シ、且其罰ヲ議シ可申候哉、奉伺也、

指令

寫真スル者ハ、出板條例ニ照準スルヲ得サルヲ以テ沒官
等ノ處分ニ及ハス、

第九 會社賣買ノ事 同第三十三号小田縣伺
八年三月四日指令

是迄府縣廳ノ免許ヲ受テ、米穀其外產物ノ會社ヲ設ケ、諸物

會社賣買

品賣買ノ証據金ヲ預リ、何月幾日限ト切符相渡ス處、右日限迄ニ取引不相濟趣ニテ會社ハ係リ訴出ル者有之、右ハ辛未九月御布告物品賣買約定ノ文例ニハ相悖リ候得共、府縣廳ハ願濟相成タル會社規則書中ニ有之モノニ付、右ハ採上裁判ニ及ヒ候モノニ可有之哉、此段相伺候也、

指令

伺ノ通

第拾 扣ハ帳ヲ以テ賣買ノ事

同上名東縣伺
八年同月日指令

當縣管下阿波國ニ於テ藍及ヒ蒸賣買取引ニ、繪符帳ト相唱、左書寫ノ如キ、以テ數掛廻ノ貫目數皮戎ヲ引殘シ、其金員ノミニテ賣買ノ詳細ハ記載無之書物ヲ以テ、幾千金モ取引致ハ、

扣ハ帳
賣買

從來ノ慣習ニテ、其事ノ簡略ナルニ拘泥候ヨリ、明治四年九月二日御布告ノ諸品賣買取引約定雛形ニ倣ハサル証書ヲ以テ訴出ル者有之、其証書ヲ見ル時ハ、賣人ヨリ蒸ニ添ヘ遣セシ代價付カ、又ハ買人ノ受取証カ、証書上一明文無之ナレ共、証書上ニ記名押印セシモノ、則買人タル慣習ナレハ、此ノ如キ証書ヲ以テ、訴出候トモ、猶取上可及裁判哉、

繪符帳ナルモノ、寫

證

一 蒸八俵

- 廿四貫八
- 廿二貫六
- 廿六貫
- 廿五貫八
- 廿三貫
- 貳 廿四貫六
- 廿三貫八
- 廿二貫六

メ百九十三貫六

内七貫 皮

風袋ノ量目ヲ引去ルヲ云

同八百 戎

賣人ヨリ買人へ為謝義手本品ヲ指贈ル分ヲ總數ノ内ニテ引去ルヲ云

正味百八十五貫八

此枮壹石四斗八升六合

十五貫目替

代二十二貫二百九十目

内五貫五百七十二文目五分

二五引

代銀内二割五歩引去ヲ云

正味十六貫七百十五文目五分

此金百二十三圓八十三錢

百三十五

明治七年戌三月十一日

牧野 嘉平 印

林 斧太郎殿

右証書受取置處代金引渡延期ノ約ヲナシタル趣ニテ、左ノ通付紙致有之

一 藥代百二十三兩

明治七戌年八月廿三日

牧野 嘉平 印

林 斧太郎殿

此ノ付紙アルヲ以テ、此ノ証書ハ、嘉平ノ買入タルヲ知ラルヘケル、此付紙ナキハ、賣買人ノ誰タルヤ、証書上ニテ判知シカタクカ故ニ、奉伺候、丁卯以前質地証文ヲ以テ金穀貸遣シ、實地不受取借主ヨリ小作証文ヲ取置、貢租諸役ハ借主ヨリ相勤居候分ハ、質物ニ不相立、尋常貸借ト見做シ、裁判ニ不

及哉ノ旨、先般相伺候處、事實証書ニ手續書相添可伺出ト、七年十二月廿七日付ヲ以テ御指令ニ付、左ニ
 一別冊第壹號^{之略}訴訟ノ儀ハ、加地子小作米淹滯ノ出訴ニ被相及候得共、其地所ハ耕作致貢米麥ハ、年々相納居候云々
 等、第二號^{之略}返答書被告入ヨリ指出、其譯判然不仕ニ付、審問候所、元慶應三卯年四月所有地ヲ五年切賣ノ証券四通
 一、小作証文並約定書等ヲ以テ舊銀札十三貫目借受、年々為利子米相渡等、然^ルニ右地所債主ハ不渡耕作致貢租諸役共相勤、罷在次第ニテ、村方小前帳ノ名面^ニ切替ニ不相成旨、第三號^{之略}手續書指出候ニ付、右旨趣原告人ハ相尋候處、慶應三卯年四月五年切賣地證券四通並、小作証文約定書等受

取、實三箇年切ノ約定ヲ以テ、舊銀札十三貫目貸渡、為利子米三石ノハ、年々受取等ニテ、貢租諸役等ハ、被告入ヨリ相納受引三箇年目ニ不至時ハ、右四通^{之略}証券ニ、裏判申受、名面切替地所共引渡^可申等ノ所、違約致シ、利子ハ淹滯地所^ニ不引渡ニ付、約定ノ通地所並小作米共、速ニ受取度旨、第四號^{之略}通手續書指出ス、
 右ノ通ニテ貢租諸役^ヲ被告ヨリ相勤、素ヨリ小前帳^ニ切替ニ不相成、次第ニ付原告人ヨリ地所並小作金穀共、引渡ヲ求ムルノ權利ハ無之、又不動産質入ノ貸借ニモ難相立ニ付、尋常貸借ト看做シ、慶應三丁卯十二月以前ニ係ルヲ以テ、不及裁判可然哉、相伺候也、

指令

第一條 採上ノ上審問シ、其實際ニ就テ、相當處分可及事、

第二條 伺ノ通

第十壹

約定違約ノ事

同第四十二号愛媛縣伺
八年三月十八日指令

茲ニ甲乙二人アリ甲貳萬圓ノ公債証書ヲ、乙ヨリ可買受ノ
定約ヲ取結ヒ、約定金トシテ乙ヨリ三百圓差出シ、甲若シ違
約スレハ償金トシテ三百圓一倍ニシテ返却シ、乙ヨリ違約
スレハ約定金損失タルヘキノ定約ヲ互ニ取結ヒ、右證券ニ
印紙貼用セサル者、約定金高ニ依リ罰金申付可然哉、相伺候
也、

指令

約定違約

生系外國
送り

約定金高ニ依リ罰金申付ヘキ事、

第十貳

生系外國送りノ事

同上司法省裁判所言渡
八年三月十九日

其方共一件左ノ通

名西
略之

第一條 明治六年五月廿七日原清藏三澤忠兵衛ヨリ生系
五百五拾四斤、英國送りノ上賣捌方依托ニヨリ、洋銀四百五
拾貳枚貸與ヘ本國ヘ積送り賣捌候所、相庭下落ヨリ、貸金差
引貳千六百貳拾貳弗六拾八セント不足分、兩人ヨリ償却請
度段、神奈川裁判所へ出訴候所、抑忠兵衛於テ關係セサル儀
ナレハ、同人ヘ償却難為致云々不服ノ旨、原告ヨリ申出タリ、
第二條 右生系ノ儀、抑乘合ヲ以テ買入候得共、外國ヘ送り
荷ハ素ヨリ借入金等清藏一己ノ取計ナルヲ、既ニ神奈川裁

判所ノ裁許ニテ明了並ニ約定書ニ調印モ不致儀ニ付送荷
勿論關係無之段被告忠兵衛申出タリ、

第三條 右ノ通ニ付雙方遂吟味所右生系原清藏ヨリ原告
ハ依托シ外國ヘ送り荷ノ儀ハ相違モ無之其項於被告關係
セサルト雖モ其後明治六年十一月下旬被告手代信太郎儀
主人ノ為ナリトテ原告方ヘ罷越右送り荷損金不殘勘辦致
シ吳候様示談ニ及ヒ候証據顯レタリ然則於原告ハ忠兵衛
清藏合併ハ勿論送り荷等於忠兵衛承諾ナリト益信用セサ
ルヲ得ス加之乘合々併ノ商法ニ於テハ其商品ヨリ生シタ
ル利益損害トモ合併人ノ關係タルハ論ヲ待タス故ニ該件
ノ如キハ忠兵衛ヨリ清藏ヲ責ムルノ權利アルト雖モ原告

ハ對シ被告ノ義務消滅スルノ條理無之况ヤ前陳ノ如ク窪
倉信太郎ヨリ原告ヘ談判ノ次第モ有之ニ於テ乎依之原告
請求高ヘ清藏ヨリ入金差引不足分被告忠兵衛ヨリ償却可
致事

引合人 代書人

右ノ通申渡候間其旨可相心得事

第拾三 賣掛ケ代金ノ事 同第四十三号置賜縣伺
八年三月二十日指令

當縣下羽前國置賜郡柳町商渡部仁兵衛代言人福田町士族
堀内滿彌ヨリ五十騎町士族安部駒吉ヘ掛リ別紙甲印ノ通
訴出候處其起原巳ノ六月廿五日以前ニアリト雖モ賣掛代
金有之又商人ヨリ商人ニ非サル者ニ係ルモノニシテ出訴

賣掛ケ
代金

期限内ナルヲ以、取上ケ被告人へ與書下渡シ候處、代言人糶町商佐藤半治乙印ノ通申出候、依テ舊米澤藩町奉行役片桐藤右衛門取調候所、丙印ノ通申立、於同藩駒吉諸帳簿類不殘引上ケ取調ノ上、家産悉皆追徵シ、負債金高ニ應シ配當致シ、不足ノ分ハ債主ノ損失トシ、同人儀ハ藩ノ例ニ依リ罪ニ科シ、且、處斷濟ノ後、債主訴出ル者有之候氏、一切不取上定規ニ有之趣ニ候、右等藩ノ法則ニ依リ、處斷ヲ經候上ハ、今更當今ノ御規則ニ照シ、不都合ノ慮有之トモ、引直シ可申筋無之儀ニ付、該件ノ如キモ不_レ及受理可然哉ニ存、候得_レ氏成規適例ニ不相見候間、為念書類_之略相添相同候也、

指令

地所
引渡

賣懸ケノ確証有之上ハ、舊藩則ニ拘ハラス、濟方裁判可及事

第拾四 地所引渡ノ事

同第五十七号滋賀縣伺
八年四月十四日指令

證文 賣渡申田地ノ事
寫

一 字何 上田何 反何 取何 步 高何 石何 斗何 升

右田地御年貢米不納仕候ニ付、此度代銀七貫八百八十目

ニ賣渡シ申候處、實正明白也、然ル上ハ、此田地ニ付、脇ヨリ

亂妨申者毛頭無御座候、萬一兎角申者有之候ハ、如判

罷出、此度埒明可仕候、為後日一札仍テ如件、

慶應二寅三月 賣主 乙 某 印

受人 何 某 印

年寄 何 某 印

甲 某 殿

右ノ通ノ證文ヲ以、甲ヨリ乙へ掛地所引渡催促出訴ニ及ヒ、
原被吟味ノ始末左ノ如シ、

一 約定ノ日ヨリ今日迄地所引渡遷延セシハ、後日請戻ノ
約定アリシニヨル、尤此事口頭ノ約定ナレバ原被兩口
符合ス、但レ原告ハ三箇年ヲ限り請戻ヲ許ヤント云ヒ、
被告ハ金子出來次第可受戻ノ約定ナリト云フ、別ニ証
據ナシ、

一 村役場水帳ハ依然乙某ノ名前ナリ、租税モ乙某ノ名前
ニテ納メ來ル、

一 甲ハ最初二箇年程、作徳米代金ヲ受取、其後ハ滞リシト

云ヒ、乙ハ作徳米ト云フニ非ス、利足トシテ差入レン金
ナリト云フ、尤小作證文ハ無之、

一 地券証ハ乙某名前ニテ戸長へ下渡相成、戸長ヨリ甲へ
渡シ即今甲ノ手ニアリ、然レ甲へ渡スト乙ハ曾テ承
諾セサリシト云フ、戸長モ此地所甲へ差入レアルトハ
兼テ承知セシ故、乙へ別段言ハスシテ、直ニ甲へ渡シタ
リト云、

右ノ如キハ証文面賣渡ニ候へ共、其實際ハ之ニ反テ、地券証
甲ノ手ニアレ共、乙ノ承諾ナケレハ之ヲ以、貸入トモ難見做
即地所引宛ノ貸金ニ付、丁卯以前ノ分ハ不及裁判候テ可然
乎、又ハ賣渡ノ名ヲ以、其實金ヲ借用スル類ハ、其物件ヲ貸入

スルモノト見做シ、丁卯以前ト雖モ取上、十箇年以内ハ、返金ノ上地所為取戻可然哉、奉伺候也。

指令

實際書入ノ田地ニ付、丁卯以前ノ分ハ受理不及事

第拾五 賣買手附金ノ事

同第六十号宮城縣伺
八年四月十八日指令

原告人管内陸前國志田郡三本木村農伊東由之輔外一名、被告入同村農村上京平外三名、米賣買手附金催促ノ訴訟、証券及、檢閱候處去ル明治四年九月二日第十一號御布告、及ヒ明治五年四月九日第十二號府縣へ御達、諸品賣買取引心得方約定証書認メ方規則ニ據ラス、買人ニテハ品位ヲ視查セズ、上米五百石一石ニ付、金四圓三十七錢五厘買、此全價二千百

賣買手附

八十七圓五十錢、内千六百圓手附トシテ相渡、被告人ニテハ該村近區ハ水田多ク、且農業純一ノ地ニテ、輒ク買得ルノ見込ヲ以テ、右米可引渡期限ヲ約シ、已ニ前金請取之、然ルニ其後、米價漸々騰貴シ、右米調達致兼、剝百方周施驅馳奔走ノ間、無用ノ冗費相嵩ミ、終ニ手附金マテ淹滞スルニ至ル、然ルト雖モ原告人其品現存スルヤ否ヲ視查セズ、卒爾ノ定約ニ出ルヲ反顧シ、其品ヲ求メスシテ手附金償却ノ義ヲ出訴スル時ハ、取上及裁判、身代限マテノ可及處分乎、又ハ假令其品ヲ請求スルニ非スト雖モ、賣買取引規則ニ悖ル証書ニ付、民法裁判上証據ニ難相立、買人ハ疎漏ノ証書ヲ受取置、賣人ハ詐偽ノ情ニ發ルニアラスト雖モ、空米ヲ取組、手附金ヲ受取、

是ヲ費用シ、他人ヲシテ損失ニ至ラシムルヲ以テ、斷獄課へ
相廻シ、至當ノ可及處置乎、此段相伺候也、

指令

現物ヲ備へ置カスレテ、賣買ノ約定ヲ取結ヒタルヲ以テ、直
ニ空物賣買ト論ス可ラサルニ付、乃チ証書面約定ノ振合ニ
因リ、聽訟上相當ノ處分及フ可キ事、

第拾六 建家賣渡ノ事

同上東京裁判所伺
八年同月日指令

高知縣士族坂本直所有ノ地所建家、同士族山崎利則へ賣渡
ノ約定致シ候末、差違レ候儀ニ付、右地所處分ノ儀、當三月十
九日附ヲ以テ相伺、同四月四日御指令本年第五十二
号十五丁見合有之候、然
ルニ其以前斷獄課ニ於テ、坂本直不束ノ慮ハ、不應輕ニ問ヒ、

建家
賣渡

贖罪申付候末、地所處分ノ儀ハ、別紙紫ノ通申聞置候儀ニ有
之候處、最前伺書ニ相漏候へ共、到底所有ノ權ハ坂本直ニ有
之候儀ニテ、復考且御指令ノ儀モ有之候ニ付、曩ニ申聞置候
ハ取消、更ニ今般伺濟ノ如ク、處分申渡可然哉、此段伺末ニ
付、猶為念、奉伺候也、

紙別

池内基ハ、坂本直ヨリ買取地所ハ、山中隣之助へ引渡シ、買
取節ノ代金ハ、直ヨリ受取ヘシ、
坂本直ハ、池内基ヨリ請取タル地所代金ハ、同人へ返却シ、
改メテ隣之助ヨリ受取ヘシ、
山中隣之助ハ、坂本直ヨリ買取約束ニ及ヒタル地所ハ、池

内基ヨリ請取、右代金ハ直へ拂フヘシ、
右ノ通申渡候事、

指令

伺ノ通

第拾七 手形出訴ノ事 同第六十一号石川縣伺
八年四月十九日指令

手形出訴

第一條 渡邊甲次郎儀、甲乙二號ノ証券へ、別ニ丙號証書ヲ
附シ、併テ三通トナシ、真田傳次郎ナル者へ、兼テ相渡有之趣
ニ付、今度違約ノ慮ヲ以テ、傳次郎ヨリ甲治郎ヲ相手取、及出
訴候處、右甲乙二號ノ證券ハ、宛名記載無之候へ共、文中ニ手
形ノ字有之候間、通俗ニ酒肆菓店ノ手形ニ、宛名記載無之分
ト同様ニ看做、取揚裁判ニ可及哉、

第二條 通俗ニ酒肆菓店等ノ手形ハ、宛無之トモ、裁判上
證據可相立儀ナレハ、譬へ商人ニ無之トモ、物品金錢トモ授
與シタル證據ニ、手形ヲ相用候儀ハ、不苦候哉、

第三條 丁號之略ノ通、雌雄社ト唱、候米商社ヨリ、指出タル米
券ヲ證據トナシ、右社ヲ相手取、正米受取方及出訴候片ハ、前
條ニ掲ル如ク手形モ同様ノ儀ニ付、宛名無之トモ、可取揚哉
ナレバ、年月日略記ノ慮ニ依リ、指下可申哉、相伺候也、

甲 覺 號

一七百貫文

丁錢

右此手形ヲ以、來月六日相渡可申處如件、

辛未十一月

渡邊 甲治郎印

號乙 覺

一七本

唐紙

内 二本

十一月二十二日渡ス

残テ五本

預リ居候

右此手形ヲ以相向候、何時ニテモ御渡可申事、

未十一月二十二日

渡邊 甲治郎印

丙 讓狀ノ事 印紙 貼用

私ヨリ渡邊甲治郎へ手形取之、預リ錢七百貫文並ニ唐紙手形面残リ五本トモ、貴殿方借金ノ内へ相渡候處實正也。然上ハ同人ヨリ御勝手次第御取立可被成候、為後日讓狀如件、

明治七戌十一月十一日

真田 傳治郎印

鍋谷 仲兵衛殿

指令

第一條 伺ノ通、

第二條 前條ト同様可心得事、

第三條 採上、年月日略記ノ庶ハ、本年當省甲第一號布達ノ

通可心得事、

第拾八

地所賣買ノ事

同第六十九号新治裁判所伺
八年四月三十日指令

第一條 明治七年太政官第百四號御布告、地所賣買致シ候
節代金受取ノ証文有之共、地券申受サレハ、買主其地所々有

地所賣買

ノ權無之云々有之候處、右御布告前賣買約定取結、其節地所
取引不相濟方令ニ至リ引渡ノ儀ヲ訴フル者、取揚ケ及裁判
可然哉、

第二條 前同斷御布告以後ニ係ル者、其地方廳於テ今ニ地
券下ケ渡無之共、雙方ヨリ賣買ノ儀不願出、下方相對ニシテ
取結ヒシ約定ノミニテハ、買受人於テ地所引渡ヲ訴フル共、
不及裁判候テ可然哉、但御規則背戾ノ慮ヲ悔悟シ、豫テ賣
主方ヘ渡シ置シ金圓ヲ取戻サンコトヲ訴フル者ハ、取揚可然
哉、

第三條 前同斷御布告ニ地券ヲ不申受ニテ後日發覺スル
片ハ、罰金トシテ証印税一倍ヲ科スヘクト有之ハ、雙方熟議

密賣買シ、既ニ地所取引相違ケル者ノ儀ニテ、前條ノ如ク約
定ノミニテ、地所取引不相濟者ハ、其約定ヲ不為遂迄ニテ、斷
獄課ヘ付レ罰金ヲ科スルニ不及儀ト相心得可然哉、奉伺候
也、

指令

第一條 地券書替ハ既ニ濟タル者ニテ、地所ノ引渡ヲ訴
ルコトナラハ、取上ケ裁判及フ可シ、若シ未タ地券書換相濟
サルニ、其書換フコトヲ言スシテ、唯ニ地所引渡シノミヲ訴
フルニ於テハ、不及受理事、

第二條 地券未タ發行セサル地方ニ於テハ、賣買雙方連名
ヲ以テ、地券ハ買主ノ方ヘ下ケ渡シヲ申立タル時ハ、地券

書換ノ手數ヲ盡シタリト看做ス可シ、賣買約定ハ相對ヲ以テ取結フ筈ニテ、官廳ニ願出ルニハ及ハス、餘ハ前條ノ通可心得事、但書事實ヲ以テ可伺出事、
第三條 前條々ノ指令ニ觸レサル分ハ、伺ノ通

聽訟指令續篇卷一終

